

フランシスカンの非暴力

物語、考察、原則、実践、資料



Ken Butigan
Mary Litell, OSF
Louie Vitale, OFM

Franciscan Nonviolence:
Stories, Reflections, Principles, Practices
and Resources



Ken Butigan, Mary Litell, OSF., and Louie Vitale, OFM
Pace e Bene Nonviolence Service

Sponsored by the OFM JPIC International Council and
The Inerfranciscan JPIC Commission

"Franciscan Nonviolence: Stories, Reflections, Principles,
Practices and Resources"

Copyright © 2003 by Pace e Bene Nonviolence Service.
Sponsored by the OFM JPIC International Council and
The Inerfranciscan JPIC Commission
ISBN:0966978390

For information:
Pace e Bene, 1420 W. Bartlett Ave., Las Vegas, NV 89106
USA. (702)648-2281 <http://www.paceebene.org/>

目次

はじめに.....	7
序文.....	9
第一部 アッシジの聖フランシスコと聖クララの物語：.....	21
第1章 聖フランシスコの回心：暴力から健全な状態へ.....	23
第2章 聖クララと階級や富みによる差別のない共同体：多様性と 一体性.....	35
第3章 非暴力の介入、出会い、そして第三の道：.....	41
第4章 多元主義、原理主義、そして積極的な非暴力：聖フランシ スコのスルタンとの出会い.....	47
第5章 積極的な非暴力と人を癒す正義：モンテ・カサーレの三人 の強盗.....	53
第6章 聖クララの断固とした粘り強さ.....	59
第7章 和解のプロセス：司教と市長の場合.....	65
第二部 積極的で変革をもたらす非暴力のための資料.....	75
1. フランシスカンの非暴力を実践するための出発点.....	77
2. 変革をもたらす非暴力の基本的諸要素.....	81
3. フランシスカンの非暴力の靈性に至る十ヶ条.....	83
4. マーチン・ルーサー・キング・ジュニアの非暴力の原則.....	85
5. 変革をもたらす非暴力を実践する試み：紛争解決の4つの段階	87
6. フランシスカンの非暴力を育むための日々の訓練.....	89
7. ト라우マと積極的で変革をもたらす非暴力との関係.....	93

8. 暴力および変革をもたらす非暴力について考察するための二時 間の集まりとその議題の一例.....	96
9. 経験から学ぶ - 平和をもたらす人となる：和平交渉についての 考察.....	102
10. 変革をもたらす非暴力に関するフランシスカンの出版物.....	111
11. 非暴力に関連する組織とインターネット資料.....	115
12. 参考文献一覧.....	119

この平和をこそ
我らの主イエス・キリストは告げ知らせ、
また与えたのでした。
そして、
キリストの宣教を新たに繰り返して行ったのは、
我らの師父フランシスコでありました。
師父は、教えを述べる時には常に始めと終わりに平和を告げ、
挨拶の際には常に平和を願い、
観想の折には常に脱我的平和を嘆息しつつ求めました。

聖ボナVENTOURA「魂の神への道程」序文



はじめに

この小冊子は、OFM JPIC(フランシスコ会正義・平和・被造物の保全)活性化委員会国際評議会の要請に基づき、IFCJP(インターフランシスカン JPIC 委員会)の支持を得て、「平和と善、非暴力サービス」(Pace e Bene Nonviolence Service)が作成したものです。

私たちフランシスカンは、世界各地で見られる武力衝突と、地球上の生命を破壊し尽くしてしまいそうな可能性に深く心を痛めています。暴力の根は、私たち一人一人の中にあるものですが、私たちは同時に暴力を克服し、もっと正義と平和に満ちた世界を築く力も持っているのです。私たちは、2001年9月11日に米国で起こったような、無辜の命を奪う理不尽で劇的な暴力に愕然としています。私たちはまた、数十万もの兄弟姉妹が、特に世界の三分の二の国々で、すべての被造物にとって持続可能な世界を築くことよりも己の利益を守ることに汲々としている特権階級の人々の政治的・経済的政策によって、静かに殺されてゆくのを知り、深く心を痛めています。

私たちフランシスカンは、平和の作り手としての役割を取り戻さなければなりません。私たちには力強い伝統があり、豊かなインスピレーションを持つ平和と和解の人々に恵まれています。彼らは、尊敬と平等と調和の探求とに基づく正しい関係を築くようにとの福音の招きに応えて生きた聖フランシスコと聖クララの模範から刺激を受けた人々です。自分の知性と創造力を駆使して粘り強く平和を追求する人々が増えない限り、多くの兵士は自分の目的遂行のために喜んで武器を使って訓練し、戦い、死んでゆきます。そして、暴力に対して暴力で対抗するという悪循環が続くのです。平和主義者を「受身」の人とか、正義のために働かないで単に争いを「鎮める」人と解するならば、フランシスカンの平和の作り手とは、平和主義者ではありません。フランシスカンとしての召命に忠実であるためには、私たちは表面化した暴力に対

抗するだけでなく、暴力の原因を未然に突き止めるという姿勢がなくてはなりません。未然に防ぐということを心のそこから望むことが必要なのです。自分自身の中にある暴力に気づき、それを克服することが求められていると同時に、社会に生ずる様々な対立や衝突を処理する方策を学ぶことが求められています。喜んで戦争のために命を投げ出す人々がいるように、世界は死の恐怖を乗り越えて、差別や対立を変質させ、取り除いてしまうような非暴力の手段にすべてを捧げる人々を必要としています。

本書の意図するところは、非暴力が福音であると同時にフランシスカンの価値観でもあることを端的に示すことです。非暴力は失敗したわけではなく、これからその本領を発揮するべきものです。私たちが喜んで耳を傾け、学ぼうとするならば、平和的で非暴力的な紛争解決のために生命を捧げた人々は、私たちに多くのことを教えてくれます。本書は、この方向に沿って人々を鼓舞することを目的としています。この道を追求して学ぼうとする人々のためには、さらに多くの資料が入手可能です。

当初、本書は地域レベルのフランシスカン共同体の考察のための資料でした。しかし、広範囲に及ぶ本書の性質を考えると、本書をさらに初期養成や生涯養成のプログラム、セミナー、黙想会などで使用することをお勧めします。非暴力を私たちの生活と活動に不可欠の要素として取り込むことによって本書を既存のプログラムに組み入れることができます。

この貴重で示唆に富む資料をフランシスカンの生涯養成のために提供してくださった Pace e Bene Nonviolence Service に感謝いたします。また、本書を数ヶ国語に翻訳してくださった方々、および、積極的な非暴力を生き、推進して下さっている多くの兄弟姉妹の方々にも、感謝申し上げます。

ローマ OFM JPIC 担当室
IFCJP 委員会

序文

変革をもたらす非暴力のフランシスカンのルーツ

わたしたちは、すべての善を
いと高く至高の神なる主に返し、
あらゆる善が主のものであることを認め、
すべてのことについて
あらゆる善の源である神に感謝しなければならない。
いと高く至高の唯一のまことの神こそ、
あらゆる誉れと尊敬、あらゆる賛美と祝福、
あらゆる感謝と光栄を有し、
神にこそ それらは帰され、
神こそ それらをお受けになるべきである。
あらゆる善は ただ「ひとり善い方」にまします神に
属するからである。

アッシジのフランシスコ

神が創造的で豊かで徹底的な非暴力の神であることを心から信じるなら、なにが違ってくるのでしょうか。このことを心から信じる時、私たちの生活および世界の生活はどのように変わるのでしょうか。

みんなでにぎやかに食卓を囲み、暴力に訴えることなく、お互いの差異を大いに楽しむような共同体を、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアは「愛に満ちた共同体」(Beloved Community)と名づけましたが、神はそのような共同体を育ててゆくことを私たちに求めておられるということを心から信じるなら、なにが違ってくるのでしょうか。聖書学者ナンシー・シュレック OSF が述べているように、神は暴力を根底から浄化する霊性を求めておられるということを信じるなら、なにが違ってくるのでしょうか。神は私たちが個人として、文化として、宇宙として完全であることを求めておられる。したがって、力強く危険に満ち、創造的で観想的、かつ預言的な非暴力の活動に私たちを招いておられるという

ことを私たちが心から信じる時、私たちの生活はどのように変化するのでしょうか。



私たちは、身体的、感情的、心理的、構造的な暴力の世界に生きており、自分自身の存在の中にも暴力を抱えています。本書は、内外に深く根ざした暴力の形態を認識する手段として、また、そのような世界における積極的な非暴力の可能性について熟考するために提供されています。

特に本書では、フランシスカンの非暴力のダイナミクスと創造力について考察します。このフランシスカンの伝統は、非暴力の愛にまします神について考える方法を提供してくれ、この非暴力の神が、私たちの日常生活および世界を視野に入れての生活において積極的な非暴力の精神を育み実践してゆくように私たちを招いておられることを理解するのを助けてくれます。

今日の霊的な挑戦とチャンス

いつの時代にも、私たちは非常に具体的かつ挑戦的な方法で、本来の自分に忠実であるように求められています。急速にグローバル化が進む現代においては、この極めて霊的な挑戦は、あらゆる局面において私たちの完全さを脅かす多くの障害物に立ち向かうことをも意味しています。経済的搾取、文化破壊、人種差別、性差別、同性愛恐怖症、環境破壊などは、暴力と不正の組織的形態であり、私たちの生存を脅かすと同時に、完全さに対する私たちの深い渴望をも危険にさらすものです。暴力とは、私たちが他の人々を支配し、非人間化し、下落させ、破壊する言語的、感情的、身体的、制度的もしくは社会構造的な行動とか状況のことで

私たちが今日直面する暴力の構造の根底にあるのは、恐怖や憎

悪、強欲といった根の深い衝動です。これらの衝動は、しばしば差別を生み、「私たち」と「彼ら」との間に埋められそうもない溝をつくります。私たちは自分の暴力を相手に投影することがよくあります。たとえば、争いの相手をなんとなく悪者に思ったり、他人の価値をおとしめるような文化的・経済的システムを正当化したり、自分を擁護し、自分が正義だと思っていることをつくりあげるために、言語的、感情的、身体的な争いの手段を用いたりします。聖書学者ウォルター・ウィンクが述べているように、「救世のための暴力(redemptive violence)」という神話が私たちの意識や文化に浸透しているのです。

現代の最大の霊的危機は信仰のそれです。現代人は善良な人々の力よりも暴力の力の方をつい信じたくなる誘惑に駆られます。つまり、愛することも暴力的になることも可能な人類が善にまします神の似姿として創られたことを忘れ、暴力に屈してしまう誘惑です。現代の私たちに突きつけられた最大の課題は、この善性を積極的に告げ知らせる道筋を、個人としてまた共同体として世界中に造ってゆくことなのです。このようにして、私たちは様々な形態の暴力に立ち向かい、非暴力の神の変革をもたらす力を恵みとして受けることができます。

フランシスコとクララ、そして信仰に根ざした非暴力

「非暴力」という言葉は1923年まで作られていませんでしたが、創造力と統合力のある非暴力の力そのものは、マハトマ・ガンジーが述べているように「極めて古くからある」のです。アッシジのフランシスコとクララは、この非暴力の力を心に描き、育み、実生活と彼らが始めた影響力のあるフランシスカン運動において実践しました。聖ボナベントゥラはその著作「魂の神への道程」の序文の中で、「平和」という言葉を10回も使っています。彼は、この言葉を神の現存と力を表わすために用い、神の平和の使者である聖フランシスコについて語っています。明らかに、平和の使徒職はフランシスコの歩んだ道程においてひときわ異彩を放っています。本書では、この平和がいかにしてフランシスコの

霊性においてかくも重要な役割を果たすようになったのか、また、この使徒職を現代においてどのように推進してゆくことができるかを考えてみたいと思います。

裕福な商人の息子、アッシジのフランシスコは、騎士道の名誉とロマンチックな愛の空想に浸りながら成長しました。彼は、無鉄砲な青春時代を過ごした後、アッシジとその隣の自治都市との戦争を経験しました。そして、戦争中に捕らえられ、捕虜として一年間牢獄で過ごしたのです。父親のおかげで釈放されて後、フランシスコは一人のハンセン病者との出会いによって、深い回心を体験しました。彼はその時生理的嫌悪感を克服し、そのハンセン病者の中にキリストの姿を見ることができたのでした。

マタイ19章21節に、イエスが一人の「金持ちの青年」に持ち物を売り払い、貧しい人々に施してから、ご自分に従うようにと言われた個所がありますが、フランシスコは1208年にこの個所の徹底的な要求を心に深く刻み、それまでの自分の在り方を完全に変えたのです。貧しく、十字架にかけられたイエスに倣いたいとの熱意に燃えていたフランシスコは、家族の財産に対するすべての請求権を放棄し、「貴婦人清貧」または「聖なる清貧」を生涯の伴侶として選んだのです。

1212年に、アッシジのクララがフランシスコの活動に加わりました。フランシスコが当時のアッシジの権力の片方の中心(台頭する商人階級)を代表する家族に生まれたとするならば、クララは、もう片方の中心(伝統的な貴族階級)の一族に生まれました。ふたりが相携えて当時の典型的な生活様式を捨てたことは、所有し、消費し、支配する世界を事実上捨てたも同じことでした。

フランシスコが自ら清貧の誓願を立てたのは、13世紀ヨーロッパに広がりつつあった経済的・社会的格差に対する直感的批判の表れでした。当時のヨーロッパは、田舎住まいから都会生活へと暮らしが変わり、商人階級が台頭し、封建制度が終焉を迎え、君主国と国民国家が生まれつつありました。これらの歴史的要因

が階級社会を育て、やむを得ない貧困を生んだのでした。

フランシスコは神が「至高」にして全き善、どこでも惜しみなく与えられる最高の善にましますことを確信していました。自発的に貧しくなるということは、貧しい人々の苦しみを分かち合うことであると同時に、すべてを与えてくださる神のいのちにあずかることでもあります。いのちの源であり、十字架にかけられたイエスであり、すべての被造物に活気を与える聖霊でもあるこの三位一体の神は、フランシスコにとって、賛美と絶え間ない感謝を捧げるべき御方なのです。こうした確信があったからこそ、フランシスコは最終的に「吟遊詩人」になることができたのです。この世の名誉とロマンチックな愛を歌う詩人ではなく、無限の慈しみと優しさで私たちを愛してくださる神を称える詩人に。

「平和のために働く」フランシスカン

平和作りの使徒職は、その後8世紀の間不完全ながら実現されてゆき、私たちの奥深くに内在する平和を掘り起こして、それを祈りと行動によって支えつつ、フランシスカンの霊性の中心的な特徴として存続してきました。本書で紹介する物語に見られるように、フランシスコは、敵対していた自治都市間に、また、キリスト教徒とイスラム教徒との間に、精力的に平和を説いてまわったのです。平和作りに対するフランシスコの献身と非暴力の介入は、グッピオの狼の話に端的に表れています。イタリアのグッピオという町と一匹の狼との争いに、彼は両者の必要を満たしながら決着をつけたのでした。フランシスコの平和的態度は、エジプトのスルタン、マリク・アル・カミルを訪問した時に、い

兄弟たちは、隠遁所やその他のどこにいても、いかなる所も自分のものとしないう、また、それについて、だれとも争わないよう注意しなければならない。そして、友人または敵、盗人または強盗など、だれが兄弟たちのもとに来てても、あたたかく迎えなければならない。

第一会則 VII,13-14

っそう説得力のある形で示されます。1219年に五回目の十字軍が派遣された時、「フランシスコは戦争の真っ最中に、武器も持たずに敵陣に出向き、敵を兄弟として愛した」のです。フランシスコは、「敵を愛せよ」とのイエスの言葉を実践し、内なる敵に直面しようとしたのでした。(「聖フランシスコと神の愚かさ」St. Francis and the Foolishness of God[Maryknoll, NY:Orbis Books, 1999], p.86)

アッシジの聖フランシスコと聖クララは、出会う人々に「パチエ・エ・ベネ」つまり「平和と善」と挨拶しました。この短い言葉は多くのことを表現しています。たとえば、ご多幸を祈ります、とか、安全で幸福でありますように、困窮しませんように、尊厳が尊重されますように、内なる善が溢れ出ますように、私たちの住む世界がこの深い平和に満たされますように、などです。それは祝福であると同時に、希望であり、出会う人々の聖性を認める方法でもありました。

在世フランシスコ会の最初の会則は、「いかなる理由があっても、武器を持つてはならない」と兄弟姉妹を戒めています。フランシスカン運動が広がっていた中世ヨーロッパの国々では、フランシスカンとなった兵士たちが武力闘争に加わらないという誓願を立てていたために、戦争が阻止された気配があります。

私たちに伝えられている聖フランシスコの書き物をちょっと読めば、彼が非暴力の精神と実践をいかに大切にしていたかがわかります。彼は、敵を愛し、敵と思われる人々に善を施すようにとのイエスの招きに従うこと、また、イエスが弟子たちに命ぜられたように素朴に、平和の作り手として、人々の間に入ってゆき、なにもものも自分のものとせず、みんなと分かち合うことを兄弟たちに求めました。

フランシスコも私たちのように、暴力に満ちた時代に生きていました。ペルーシアにおける彼の挫折と投獄と病気は、臨床的に「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」と呼ばれる、現代の戦争を

生き延びた人々の体験を暗示しています。暴力と暴力が引き起こす危機を体験した結果、フランシスコはすべての人に「平和と善」と挨拶する平和の人となったのです。フランシスコの平和作りは、次の三つの福音に基づく信念に根ざしています。

1. 神は全き善であり、すべての善は神から来る

フランシスコは神をすべての善の源であり、無条件の愛の神であると感じていました。「創造的で、豊かで、徹底的な非暴力」は、この無条件の愛を表現するもう一つの方法です。フランシスコは、この神の善とあわれみが誰の目にも見えるような形で自分自身の中に、他者の中に、そしてすべての被造物の中に存在するような方法で生きることを模索していました。この神の善とあわれみは、真の平和の源なのです。

2. 福音的な方法とは積極的な愛の方法

敵を愛すること、もう片方の頬を差し出すこと、飢えた人に食べ物を与えること、自分の命を捧げること - これらは、フランシスコによれば、受動性や諦念の表れではなく、イエスの神の国を表わす積極的な表現なのです。イエスは、「剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ 26:52)と言われながら、イエスを歓迎しようとしないうサマリア人に対して天から火を降らせてもよいかと尋ねる弟子たちを戒められました(ルカ 9:51 - 56)。このような好戦的な活動は、世界各地の武力衝突における爆撃のニュースを耳にする現代の私たちにも馴染みの深いものです。イエスは、互いの重荷を背負いあい、敵を愛し、自分のものを他者と分かち合いながら、あわれみに基づく暴力の変質を求めておられます。イエスは最期に、「彼らは自分が何をしているのか知らないのです」と、ご自分を十字架につけた人々の赦しを父なる神に求められます(ルカ 23:34)。

3. 自ら求めて貧しくなることは真の平和の役に立ち、これを支える

富みはしばしば労働者の搾取と地球の乱開発による不正から生まれています。同時に、富みが蓄積されると、それを守ろうとして問題が起こります。つまり、富は不平等の産物であり、その不平等のゆえに、守りを固めようとする姿勢、すなわち、自分の富みを守るために喜んで戦争しようとする姿勢が生まれるというわけです。私たちが何も持っていなければ、守る必要がありません。というよりも、持っている場合には、それは分かち合うべきであって、ため込むべきものではないのです。中東から考古学的資料が発掘され、それによると、住居のサイズが基本的に同一であった時代は、平和であったことがわかります。人々の住居のサイズに格差が出始めると、社会葛藤や武力衝突の起こった形跡がより多く見られます。非暴力の手段は、究極的には、具体的な暴力の形に対処する手段であるばかりでなく、総合的な一つの生き方でもあります。すなわち、神、隣人、自分自身、そしてすべての被造物に対する応答の仕方に影響を与えるような、真に霊的な探求でもあるのです。

現代におけるフランシスカンの平和作り

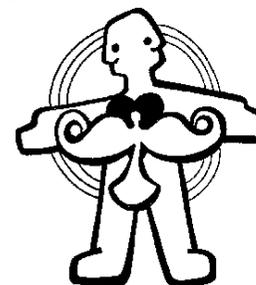
積極的な非暴力を長いこと実践している兄弟、アラン・リチャール OFM は、次のように述べています。「福音書の八つの幸いとキリストの模範に深い影響を受けたガンジー主義者の非暴力と、フランシスカンの福音書に対する忠実な姿勢との間には深いつながりがあります」(“Concerning Nonviolence and the Franciscan Movement”, *The Cord*, May 1989)。アランはフランシスカンの精神と非暴力の基本的諸要素との類似性を指摘しています。つまり、フランシスカンの非暴力はすべての人々 私たちだけでなく敵対する人々も含めて が善を為すことも悪を為すこともあり得るということを承知のうえの深い憐れみに根ざしているという点です。これは、すべての被造物に敬意を表わす憐れみに満ちた愛なのです。この愛は深い連帯へと通ずるもので、現代の私たちもすべての生きものと連帯し、彼らの苦しみを分かち合うように招かれています。アランは、現代の非暴力の最大の中心は貧し

い人々の生存競争の中にあり、自ら貧しくあることを選んだ私たちもしばしば彼らの中に含まれると述べています。

この傾向は過去数十年きわめて顕著に現れています。たとえば、1980年代には、自由を求めた多くの非暴力運動が世界中に起こりました。そのほとんどは、国を奪われた諸民族の間に起こったもので、フィリピンや南アフリカ、東欧とラテン・アメリカの一部の地域の政治構造を変えたのでした。フランス人たちは、世界中でこうした非暴力の変革のプロセスに関わり、支援すると同時にそこから影響を受けたのです。フランス人の世界に広がった非暴力に対する関心は、それ以来、創造的な非暴力を推進する地域的・国家的・国際的プロジェクトとして盛んになっています。

多くの人々は非暴力に対して疑問を抱いていますが、それは彼らが非暴力のことを暴力と破壊を前にして受身でいることだと解釈しているからです。しかし、イエスは受身ではありませんでした。イエスは、暴力的で圧制的な人々とやりあい、抵抗することすらありました。聖書学者ウォルター・ウィンクが代弁する現代聖書学の一派は、このことをイエスの積極的な愛の「第三の方法」と表現しています。つまり、受身でも暴力的でもない方法のことです。たとえば、ウィンクの説明によれば、「悪を行う人に抵抗してはならない」とのイエスの戒めは、「暴力をもって抵抗してはならない」という意味になります（Wink, *Engaging the Powers.*, p.100）。「もう一方の頬をも向けなさい」、「下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい」、「だれかが1ミリオン行くように強いるなら、一緒に2ミリオン行きなさい」とのイエスの教えをウィンクは、不正に対する創造的で影響力のある応答であると言っています。なぜなら、そうすることによって、害を加える者の暴力が露見し、害を加える者の心にディレンマを生じさせ、害を加える者に、暴力を与えている相手の人間性を直視させずにはおかないからです（Wink, pp.101-111）。イエスは、当事者双方が互いに抑圧しあうという悪循環から解放されるようなチャンスを生み出すことによって、敵対する相手に対して、不正な態度と構造

に挑戦するような方法で立ち向かうようにと私たちに促しておられます。



これらの基本的な福音主義的原則は、現代の非暴力の実践者によって実行されています。マーチン・ルーサー・キング・ジュニアは、晩年、人類を前にしての厳しい選択は今や「非暴力か非存在」のいずれかであると述べています。暴力的な手段は報復的な暴力の連鎖を刺激します。そして、人類が今すさまじい恐怖に満ちた状態を引き起こす可能性を持っていることを考えると、暴力の応酬は想像がで

きないほど制御不能になってゆきます。イエスの「第三の方法」はキングにとってますます現実的な選択肢と思われました。

フランシスコの時代と同じように現代においても、聖霊は私たちに非暴力の実践を促しておられます。フランシスコとその仲間たちと同じように、私たちもまた驚くべき方法で、霊的刷新を、正義と平和を、すべての被造物に対するあわれみと尊敬を渴望する運動に影響されて、この運動に参加することになります。マハトマ・ガンジーやマーチン・ルーサー・キング・ジュニア、アウン・サン・スーチーなどのような非暴力の力を見せてくれた英雄的な人々がいる一方で、おもいやりのある積極的な非暴力による現代社会の変革が、今全世界で群集の力で実現されつつあります。彼らの状況が彼らの勇気とおもいやりと創造性を引き出したのです。

イエス、クララとフランシスコ、ガンジー、その他多くの人々の洞察力と模範に従って、彼らは、創造的で変革をもたらす力のある非暴力を実践しています。そのような非暴力の生き方は、個人および社会が変わってゆく継続的なプロセスであり、愛の力と、すべての人の幸福を願う気持ち、そして人間相互間および社会構造的な暴力の連鎖を断ち切ろうとする願いとに根ざした在り方で

あると同時に行動の仕方でもあるのです。この変革をもたらす非暴力はしばしば次のことを含みます。

自分や他者の傷ついた内面や聖なる内面を認識すること。
他者の話に積極的に耳を傾け、私たちのだれもがそれぞれ一片の真実を持っていることを認められるような場を、創造的にかつ勇気をもって、設けること。

「私たち対彼ら」という考え方や行動を改めること。
威圧的で支配的な権力を見逃さず、これを積極的に変革すること。

非暴力の個人の力や民衆の力を結集させて、支配の構図やそれに受動的に屈してしまう傾向、またはそれらの構図に対抗する手段としての暴力に替わる創造的な手段とすること。

暴力の力を変えるために率先して、紛争の原因を根本から取り除くような正義と思いやりのある解決策をつくること。

積極的な非暴力の手段は、私たちが新たな霊的生涯養成のプロセスへと導くものです。このプロセスにおいて、私たちは自分の行動パターンを見直すことを学びます。すなわち、家族や教会、社会の中で暴力のパターンによって形作られた自己を見直すのです。私たちは「自分流の」新しい考え方や感じ方、信じ方ができるように行動を起こすこととなります。こうして、私たちは自分の生活の源であり意味であるもの、すなわち私たちにいのちを与え、支えてくださっている神がいかに非暴力の神であることを発見するのです。神は私たちやすべての被造物が完全であることを望んでおられ、自分自身や家族、共同体、世界を癒しながら、この「非暴力の生活」を実践するように私たちに招いておられるのです。

本書

本書は、1989年に米国ネバダ州ラスベガスで始まった「パチェ・エ・ベネ」という新生フランシスカン運動のメンバーによるフランシスカンの平和作りの道筋を考察しようとするものです。

非暴力についての資料は他にもたくさんありますが（そのうちのいくつかは、巻末の参考文献に記してあります）、この小冊子が、昔フランシスコとクララが辿った非暴力の平和の道を私たちも辿ることができるよう導いてくれることを願ってやみません。

私たちに伝えられているフランシスコとクララについての物語の多くは、ふたりの非暴力の教えと実践を反映しています。本書では、それらの物語のうち七つのエピソードについて考察し、フランシスカンの伝統の初期に実践されていた平和作りへの様々なアプローチを解明したいと思います。これらの物語は積極的な非暴力がいかに大切であることを示してくれています。積極的な非暴力には、平和作りへの転向、非暴力の介入と執り成し、相手に対する敬意と思いやりのある紛争解決、正義と和睦の実現などが含まれます。最後に、現代の一般の人々の実例をご紹介します。その中には、現代の様々な運動や出来事に関わっているフランシスカンもいます。彼らの生活やこれらの運動の中に、変革をもたらす非暴力のダイナミクスと力の実例を見ることができます。

これから述べる七つの項目のそれぞれで、初期のフランシスカンの出典から、特に積極的な非暴力を実践したエピソードを一つずつ紹介します。次に、そのエピソードについて注釈を加え、そのテーマと非暴力のダイナミクスを明らかにします。そして最後に、非暴力を実践している現代のフランシスカンや非フランシスカンの実例を紹介します。その末尾に、積極的な非暴力の原則、紛争を仲裁する手引き、非暴力について共同体全体として省察する課題のサンプル、さらなる研究のための資料を付してあります。

フランシスコの変革しようとするたつての願いをわたしたちが実践できるようになることを願って、本書を捧げます。

Mary Litell, O.S.F., Louis Vitale, O.F.M.,
Kenneth Michael Butigan
Pace e Bene Nonviolence Service

第一部 アッシジの聖フランシスコと聖クララの物語：
積極的で変革をもたらす非暴力に関する考察



第1章 聖フランシスコの回心：暴力から健全な状態へ

あるとき、ペルーシアとアッシジの市民との間に流血の争いが起こって、フランシスコは他の仲間とともに捕虜となって、かせをかけられて獄の苦難を嘗めなければならなかった（2チェラノ4）。

[投獄されて後長い療養生活を送ったフランシスコは、再び英雄的な兵士になろうとして十字軍に加わった。]

アプーリアに行こうとしてスポレトまで来た時、フランシスコは少し気分が悪くなった。それでも旅について心配していたフランシスコは、半ば眠り、半ば目覚めているような状態だったが、その時、どこに行こうとしているのかと問いかける声を聞いた。フランシスコは声の主に自分の計画のすべてを打ち明けた。するとその声はこう尋ねた：「おまえは、主人としもべのどちらに、より大きな期待をかけるのか。」フランシスコは答えた：「主です。」「それではなぜおまえはしもべのために主を、配下の者のために主人を捨てようとしているのか。」フランシスコは言った：「主よ、私に何をお望みですか。」主は言われた：「故郷に戻りなさい。そこで、おまえの為すべきことが告げられるだろう。おまえの見た夢には別の意味があることを知りなさい。」

三人の伴侶の伝記 6

考察

非暴力はしばしば暴力との関連において現れます。元アッシジの市長アーナルド・フォルティーニはその著書「アッシジのフランシスコ」の中で、フランシスコの生きていた時代の残虐さについて具体的に描写しています。彼は当時の兵士たちの言葉を次のように引用しています：「牧草地に戦陣が張られ、襲撃の叫びが聞こえ、旗のついた槍で刺し貫かれた死体が塹壕に転がっているのを見るのは良いものだ」と（Fortini, p.140）。どのような拷問も、血を見て喜ぶ拷問者や見物人にとっては大したものではありませんでした。彼らは戦闘や死者数に大喜びしていました。フォルテ

イーニも主張しているように、流血は彼らの生活に喜びを与えるものだったのです。それは権力と富みを与えるものでもありませんでした。

フランシスコの時代には、アッシジでは金持ちと貧乏人との間に、持てる者と持たざる者との間に内乱が起こっていました。これらの内乱は権力と経済的利益を得るために戦われていました。新興の商人たちは貴族階級に対抗していました。1202年にアッシジとペルーシアとの間に血生臭い戦争が勃発した時、20才のフランシスコは、意気揚揚として誇り高く戦いに出かけてゆきました。しかしアッシジ側は敵に圧倒され、敗退してしまいます。フォルティーニはこう書いています：「殺された人々が戦場に転がっている様子は言語に絶するほど恐ろしいものだった... 戦場は夥しい死体で覆われていた。死体は手足をもがれ、原形をとどめないほどにむごたらしい殺され方をしていた... アッシジの人々はこの虐殺に言葉を失い、... 多くのアッシジの人々が捕虜の身となった... その中にはフランシスコもいた... 野蛮な残忍さと血に飢えた誇りとに満ちたこの戦いは、死屍累々とした光景と、果てしない嘆きとによって、フランシスコの暖かく寛大な心に決して癒されることのない深い傷を負わせたのだった... 敵に出会って心が焼けつくような狂気の瞬間を体験する人はみな、後で悪夢にうなされるのである。」（フォルティーニ、pp154-155）

コストラーダの戦いの後、フランシスコはペルーシアに連れてゆかれ、そこで投獄されました。彼は運のよいほうでした。射手や歩兵は虐殺されましたが、騎士や馬に乗っていた人は身代金のために拘束されていたからです。フランシスコが入れられていた牢獄は粗末で、混雑していて、しかも残虐行為に満ちていました。フランシスコはなんとかこの残虐さを切り抜け、仲間の捕虜たちを元気付けようと努力しました。それにもかかわらず、彼は重病で倒れてしまいました。ついに父親が身代金を払って彼は釈放されました。愛情あふれる母親の看護のもとで、フランシスコは長い療養生活を送りました。そして元気を取り戻しましたが、チェラノによれば、「このことがあってからというもの、彼は自分のことを価値のないものと見なし、また以前に感動を覚え、好きだった

ものまでも軽蔑するようになった」(1 チェラノ 4) のです。

フランシスコは戦争を好む傾向と栄誉への憧れを完全に捨て去ったわけではありませんでした。それらはあまりにも彼の文化の一部となっていました。彼は再び、教皇軍に加勢していた偉大な騎士ゴーティエ・ド・ブリエンヌ伯の旗の下に加わるべく出発しました。彼は自分の家が武器や盾などあらゆる種類の武具でいっぱいになっている夢を見て、この十字軍に心を奪われていたのです。フランシスコはこの夢を、アブーリアに出陣し、戦って栄



誉を受ける成功のしるしであると考えました。ところが、神秘的な声がフランシスコに語りかけました：「おまえは、主人としもべのどちらに、より大きな期待をかけるのか」と。そしてフランシスコに故郷に戻るよう促しました。故郷に帰ればそこで自分の為

すべきことが示されるはずでした。フランシスコはアッシジに戻り、再び放蕩な生活を始めましたが、ハンセン病者に出会い、その病人に接吻し、教会を建て直すようにとの十字架からの声を聞くことになるのです。

こうして、フランシスコの中に徹底的な変化が訪れます。貧しい人々に施しをし、ハンセン病者や社会から疎外された人々の仲間になりたいとの彼の熱意は、彼をそれまでとは全く違った社会階級の生活に導くに至りました。彼がガイド司教の面前で自分のすべての持ち物を、身につけていた衣服に至るまで父親に返したとき、彼の回心は最も端的に表れます。

フランシスコは十字架からのみ言葉を字義どおりに受け取り、教会の修復に取り掛かりました。そして、愛のこもった方法で貧しい人々やハンセン病者の仲間に加わりました。フランシスコは劇的な社会変化を遂げたのです。彼は家族やそれまでの仲間とも縁を切りました。現代的な言い方をすれば、フランシスコは徹底的に貧しい者を優先したわけです。

フランシスコと非暴力

本書では、快楽と軽薄と贅沢の生活をやめて熱心なキリストの弟子になったフランシスコの回心にだけ重点を置いているわけではありません。私たちが特に関心を寄せているのは、キリストの非暴力に従ったフランシスコのやり方なのです。

非暴力は、すでに述べたように、暴力との関連において現れます。暴力がひどければそれだけ、暴力で応酬したい誘惑も強くなるものなのです。ところが、ひどい暴力はこれと逆の刺激を一部の人に与えることがあります。ある人々は、報復することを望まず、別の対応の仕方を探します。彼らは、積極的な非暴力を実践する方向に意欲をかき立てられています。この点について、聖フランシスコの生活はどうだったでしょうか。

フォルティーニは、戦争の恐怖と戦争がフランシスコに与えた影響について描写しています。フランシスコはペルージア戦役で危うく血を流すところでした。この戦争とその残虐性のために、フランシスコは今で言う「心的外傷後ストレス障害」(PTSD)に苦しんだと思われます。ベトナム戦争でしきりに使われるようになったこの用語は、すべての戦争の退役軍人とその他の忘れられないほど大きな精神的ダメージを受けて生き残った人々に対して用いられます。このPTSDに苦しむ人々は、新たな形態の暴力と葛藤を模索することもあります。多くの場合、衝突を避けようとしません。彼らは、以前に楽しんでいた活動に対する興味を失い、他人に対しても無関心になることが多いのです。そして、外界との接触を絶ち、しばしば悪夢にうなされ、不眠、鬱状態、絶望感、焦燥感、怒りなどに悩まされます。フランシスコも戦争のトラウマを体験し、戦争で生き残った人々の特徴の多くを持っていました。怒りを処理することはいつも大変なことでした。彼は鬱状態にも悩まされました。不眠や悪夢も体験しています。以前に楽しんでいた自然との生活に対する興味すら失っています。

戦争や獄中生活を体験した人々に共通して見られるのは、「生存者の罪悪感」です。フランシスコの貧しい人々への特別な思い入れは、ペルーシアとの戦争で彼とともに戦った貧しいアッシジの兵士たちが虐殺されている一方で、裕福な商人の息子であった自分は殺されずに釈放を待っているということに対する自責の念に根ざす部分もあったのではないかと思います。この重荷 自分は命を返してもらえるのに、他の人々は殺されてゆくという重荷 を強烈に意識した結果、フランシスコは自分の命を助けてくれた特権を放棄しようと思うようになったのかも知れません。この気づきが、富みに対する嫌悪感を彼の中に芽生えさせ、その反対の行動を取らせたのではないのでしょうか。すなわち、「貴婦人清貧」を生涯の伴侶とし、貧しい人々と運命をともにするという行動です。これらはすべて、フランシスコを聖人たらしめる資質であり、戦争の残虐性とそのむかつくような後遺症とに苦しみながら、その苦しみの中で生まれた聖性と言えるでしょう。

PTSD に苦しむ人々の多くは、様々な形に姿を変えた暴力の生活を続けます。獄中で生涯を終える人もいれば、暴力的な死を迎える人もいます。PTSD から立ち直る人もいれば、立ち直れない人もいます。トラウマの重症度はしばしばその結果の予測指標となります。フランシスコの場合、フォルティーニも述べているように、症状はきわめて深刻でした。しかし、フランシスコはこれらの障害を聖性に向かう道に変えるユニークな恵みを神から授けられていたのです。

兄弟たちは、この世で旅をする時、旅には何も、財布も袋もパンも金も杖も持って行ってはならない。どの家に入っても、先ず「この家に平安を」と言い、その家に泊まって、彼らのもとにある物を食べたり、飲んだりすべきである。悪人に逆らわず、かえって、頬を打つ者にもう一方の頬も向けるべきである。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には、だれにでも自分自身を与えるべきである。持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。

第一会則 XIV, 1-6

大きなストレスを処理する最も重要な方法は観想です。フラン

シスコは丘の中腹にある洞窟に入って神に近づきました。彼は再び自然と触れ合いました。彼は人々への奉仕に没頭しましたが、それはしばしば驚くほど治療効果のある方法でした。彼は十字軍の「シナリオ」を書き換えようとし、十字架だけを持ってスルタンの前に進み出ました。彼は盗賊や狼の群れに対する恐怖を克服しました。彼はすべての人を ハンセン病者でさえも、いや、むしろ特にハンセン病者を キリストの面影をとどめる人としてたいせつにし、深い尊敬の念を持って遇いました。このようにしてフランシスコは、自分の内にある暴力を克服し、トラウマを癒したのです。彼の兄弟たちおよびクララとの親しい関係は、後に彼に新しく深い共同体の意味を悟らせるようになります。これらは、本書で取り上げる非暴力の原則も含めて、非暴力の方法の特徴です。非暴力を実践するためには、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアが「愛に満ちた共同体」(Beloved Community)と述べた生活を実践して、心を根底から変えることが必要です。フランシスコはすべての人を深く尊敬していたので、だれのことでも敵と思うことはありませんでした。彼は敵でさえも、自分の仲間として迎えることを望みました。

フランシスコは戦士として出発しましたが、良心的な反戦者となったのです。彼は最初ゴートイエ・ド・ブリエンヌ伯率いる十字軍に加わりましたが、後に離脱して、スルタンを訪れる時には、剣ではなく、十字架を携えることによって非武装の誓いを実践したのでした。

それだけではなく、フランシスコは他の人々にも武器を使わないようにと勧めました。フランシスコ会元総長のヘルマン・シャルルックは次のように述べています：「フランシスコは、すべての弟子たちに武器を持つことを禁じました。その結果、一部の封建領主たちは軍隊を召集することが難しくなりました。武器を持つことを拒否する在世フランシスコが大勢いたからです。フランシスコによるこの単純な要求は、ヨーロッパの封建制度の終焉に一役買ったのです」(Herman Schaluck, OFM, *The Anthonian*, New York, 1995, pp. 22-23)。兄弟ヘルマンが書いているように、フランシスコは現代の私たちにとってふさわしい模範です。なぜ

なら、彼は一度は戦争を栄光への道と考えたことがありますが、結局は戦争が人類を破滅させるものであると考えるに至ったからです。(このような気づきは、無差別爆撃やスマート爆弾、テロリズム、子どもたちの命が犠牲になる経済制裁などを抱えた現代では、特に緊急に必要なことです。)シャルックが指摘しているように、中世の一時期、ヨーロッパの一部で、フランシスコが戦争廃止に一役買った形跡があります。

つまるところ、私たちは深い宗教的な回心について話をしているわけです。フランシスコは当時の極端な暴力 最初は彼自身が魅了され、熱心に加わった暴力 を超越して、神のあわれみに心を動かされ、変化して行きました。彼は、恐らく戦場や獄中で、人や生きとし生けるものはみな、それぞれに傷ついた部分と聖なる部分を併せ持っているということに気が付いたのではないのでしょうか。

これが非暴力の原点です。非暴力の変革をもたらす力は、神の現存に気づくことがその出発点であると同時に終着点でもあります。暴力の連鎖を断ち切るのはこの神の現存なのです。武力衝突が解決する時、暴力のシナリオが当事者双方の聖なる部分を抱きしめるように書き直される時、そして、報復の連鎖を断ち切るために創造力が用いられる時、そこには私たちを一つにまとめてくださる神の霊がおられるのです。フランシスコは、傷ついた内面から出発し、ひどい病気を体験した後、暴力的な衝動を克服する深い回心を遂げたのでした。全き愛にまします神は、あわれみの神に他ならないことをフランシスコは悟りました。人類とすべての被造物は、徹底的にそして完全に愛し、愛されるように造られているのです。この考え方は、私たちを隔てる差別を克服し、私たちを一つにまとめてくれるような秘められた聖なる部分を発見するようにと私たちを促しています。

フランシスコはようやく、自分の本当の召し出しを理解するに至ります。すなわち、神が私たちを愛してくださったように、互いに愛し合うようにとの召し出しです。実際的な言い方をすれば、それは世界を様々な敵陣に分けようとする暴力の傾向に抵抗

することを意味します。非暴力を実践する人々は、すべての生きものを、なかならず己の敵を愛することを少しずつ学んでゆくことによって、真実の自分に立ち戻ろうと努めます。「全キリスト者への手紙 II」の中で、フランシスコは「私たちは敵を愛し、私たちを憎む人々にも善を行わなければなりません」(38)と述べています。

フランシスコは「遺言」の中で、「主は私に挨拶の言葉を啓示してくださいました。私たちはこう言うべきです。『主があなたに平和を与えてくださいますように』」と記しています。ボナベントゥラはこう回想しています：「師父フランシスコは、教えを述べる時には常に始めと終わりに平和を告げ、挨拶の際には常に平和を願いました」(魂の神への道程、1)。フランシスコは兄弟たちに、人の家に入る時には「この家に平安を」と言いなさいと教えています。

本書の著者の一人との会話の中で、歴史家であり神学者でもある Joseph Chinnici, OFM は次のような疑問を投げかけています：「これらの挨拶の言葉は、歴史的に見て、当時としては普段使われない珍しい言葉なのだが、フランシスコはなぜこうした挨拶を使ったのだろう。」Chinnici は、これらの平和の挨拶は当時の社会行動を反映しているのではないかと指摘しています。これらの言葉は、当時の暴力的な風潮と、暴力を育み、助長するような支配体制に屈しないようにとの呼びかけだったと思われます。そのような平和を求めることは一種の社会行動だったのです。つまり、積極的な非暴力の行動です。この社会行動は、暴力の構造や人々を敵味方に分けるような政治経済体制を打破しようとする試みです。フランシスコが生涯をかけて追求していたことは、新しい平和の挨拶によって暴力を克服することだった、と Chinnici は言っています。

Chinnici はこれを潜在的なキリスト論と考えています。暴力を変質させようとの試みは、私たちをよりいっそうキリストの人格に近づけるものだからです。フランシスコは、暴力を体験した結果、暴力を克服された御方と一体になろうとしたのです。フラン

シスコは、剣をさやに納めるようにペトロに命じ、大祭司の手下の切り落とされた耳を癒された御方に自分を重ね合わせました。そして、十字架上で、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは自分がなにをしているか知らないのです」と祈られた御方に自分を重ね合わせたのでした。フランシスコの聖痕は、この非暴力のキリストとの深い一致の表れであり、戦う人から平和の人へと完全な回心を遂げたしるしなのです。

キリストがご復活の後に言われた言葉は、「あなたがたに平和があるように」という挨拶でした。フランシスコはこの平和のメッセージを当時の社会に持ち込みました。フランシスコは平和を述べ伝えるという生涯の計画を「太陽の歌」に凝縮した、と Chinnici は述べています。Chinnici はこの歌のことを「宇宙的な平和の賛歌」と呼んでいます。この歌の中で、すべての被造物は兄弟姉妹として扱われています。すべてのものは、すべてを創造された神のみわざに参与しています。ですから、平和を実践することは必然のことなのです。このことは現代の私たちにも求められていることです。そのためには、「平和を行動で示す兄弟姉妹の同盟軍が必要です」と Chinnici は述べています。

現代の実例

南アジアにおける平和への歩み

パキスタンのハイデラバードから挨拶を送ります。「全国正義と平和委員会」(National Commission for Justice and Peace)が「正義と平和委員会」およびその他の非政府組織(NGO)と協力して、ここパキスタンで地域の平和推進のためにどんなことをしているのかを皆様にご紹介したいと思います。

私はジュネーブで行われた第58回国連人権会議、およびオランダで行われたハイデラバード・ハーレム提携プログラム(Hyderabad Harlm relationship programs)に出席した後の、2002年5月6日にパキスタンに戻ってまいりました。予定を変更するに至った二つの事柄が私の注意を引きました。一つは、

気温が華氏45度にまで下がったことです。もう一つは、国全体がインドに対して臨戦態勢にあるように見えることでした。テレビもラジオも新聞もこぞって、貧しいインド・パキスタン両国の戦争(およびさらに悪い核戦争)への強い恐怖感を伝えていました。

この国の暑い天気を変えることはできないけれども、戦争を回避するために行動を起こさなければならないというのが、私たち事務局にいた者の一致した意見でした。私たちは他のNGOに働きかけ、戦争回避のための行動計画を作成しました。

1. 気づきのプログラム

地域の政治・社会グループと様々な市民集会を開き、そこで戦争、ことに核戦争の残す後遺症の恐ろしさを強調しました。日本の長崎や広島で起こったことを説明すると同時に、戦争がインド亜大陸や全世界にもたらす混乱についても注意を喚起しました。この戦争を回避し、平和の推進のために積極的に行動してゆく必要性を人々に訴えました。

2. 人権擁護活動家の集まり

NCJP(全国正義と平和委員会)はシンド地方全域から人権擁護活動家を集めて会議を開き、国が置かれている状況について考えるとともに、それぞれの地域で平和への気づきのプログラムを組織してゆくように彼らを励ましました。私たちはまた、彼らに報道関係の人々に会って新聞や雑誌にもっと平和推進の記事を書いてもらうように要請しました。

3. ハイデラバードにおける平和集会

さまざまなNGOグループが2002年5月27日にハイデラバードで平和行進を組織しました。いろいろなグループに属する200名の男女がハイデラバード記者クラブの前に集まり、地域のアーティストたちが長崎と広島の苦しみを強調するドラマを演じて、パキスタンとインドの指導者たちに無益な戦争を回避するように訴えま



した。

平和の必要性和自然と人命の尊重を訴えたプラカードや横断幕を掲げた平和行進がハイデラバード市内を練り歩きました。行進が終わると、共同声明が読み上げられ、報道関係者に配られました。さまざまな宗教、民族、政治団体に属する善意の人々が一つになって、平和と調和の推進のために働いたのです。(パキスタン、ハイデラバード NCJP 委員長、Philip Hira OFM 寄稿)

もう一つの戦争を戦った退役軍人の暴力から健全な状態への歩み

フランススコがペルーシアで戦争の恐ろしさを体験してからおよそ800年後のこと、デイヴもベトナムで戦争の恐ろしさを体験しました。彼は瀕死の重傷を負いながら、一命を取りとめたのです。それ以来彼の生活は、多くの退役軍人と同じように、「姉妹である死」に直面したことによって特徴付けられます。彼は自分のことを宗教的な人間だとは思っていませんが、今では私たちが「小さな光の粒子のようなものでできており、すべての人やすべてのものをつながっている」と感じています。

デイヴは現在、建築工事の現場監督として働いています。小さなフランススコ会小教区の新しい教会建築現場で働いていた時、彼は自分の体験をその司牧協力者であるシスター・デボラに説明する言葉もないし、また誰も理解したり信じたりしてくれないと思うからとてもすべてを語り尽くすことはできないが、と言いながら打ち明けています。しかし彼の描写は、修道者であり、神秘家であり、非暴力の提唱者であったトーマス・マーティンの次の問いかけを彷彿させるものでした:「人々がきらめく星のように輝いていることを本人たちにどうやって伝えることができるだろう。」

会話が進むにつれ、デイヴが自分と世界を、フランススコの回心のように、まったく新しい目で見ることができるようになった時、彼の生活も変わったのです。彼は私たちとすべての被造物が互いに結び付けられ、光によって輝いているようなそんな世界に

ついて他の人々に話すことができるようになりました。彼の小さな世界における暴力から健全な状態への歩みは、フランススコのそれと似ています。

ゆるしの大使：ユスフ・オマール・アルアザリ博士

元駐米ソマリア大使であり、ソマリアの国連代表であったユスフ・オマール・アルアザリ博士はソマリアでの軍事クーデターの後6年間投獄されていました。最初の6ヶ月間は、独房に監禁され毎日拷問を受けていました。憎しみと絶望のあまり気が狂ってしまうのではないかと恐れた彼は、ついに祈るようになり、神の現存を体験するようになります。彼の完全さへの歩みは獄中から始まったのです。それ以来、彼はソマリアに平和と和睦をもたらすために活動を続けています。内戦を終結させようと試みて失敗し、その後のソマリアの膠着した政治情勢を体験した彼とその他の何人かは、長年にわたる暴力から生じた敵意や、不信、不満を取り除くために村レベルでの地道な活動を始めました。和解活動が続けられ、国の政治が徐々に復興されてくるにつれ、彼らは、アラウの恵みによるゆるしが人々の心に訴える主要因であることを確信するに至ります。(この話はマイケル・ヘンダーソンの著書に載っています。Michael Henderson, *Forgiveness: Breaking the Chain of Hate*, pp 133-137.)

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、福音的非暴力の生活へと回心したような行動や意識の実例がありますか。

第2章 聖クララと階級や富みによる差別のない

共同体：多様性と一体性

もし、だれかが神のおん勧めに従ってこの生活に入ることを望み、わたしたちのもとに来たならば、院長はすべての姉妹の同意を得なければならない。修道院長の選挙において、姉妹たちは、聖会法の規定を守る義務がある。

またある場合、全姉妹によって、院長が姉妹たちへの奉仕と共益のためには不十分であると認められた時は、彼女たちは、なるべく早く前記の方法に従って、院長

として母として、他の者を選ばなければならない。彼女〔修道院長〕はすべてにおいて、ことに聖務堂・寝室・食堂・病棟、及び衣服について、他の者と同様の共同生活を守らなければならない。

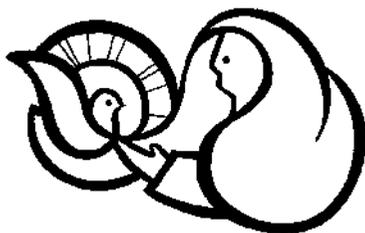
院長は、少なくとも週に一回、姉妹たちを集会のために集めなければならない。そこにおいて、彼女は、すべての姉妹たちと共に、修道院の利益と体面上必要な事柄とに関して評議しなければならない。主は、しばしばもっとも小さい者に、最も良いことを現わされるからである。

相互の愛と平和の一致を保つため、修道院のすべての役員は、大部分の姉妹の同意によって選ばなければならない。

会則：II, 1

考察

アッシジのクララがアッシジやその近辺の女性たちと共同生活を始めようとした時、シトー会修道女たちのための規則をモデルにした会則が与えられました。その中では、共同体を導く女性のために修道院長という肩書きが与えられています。クララは、最終的にはこの肩書きを受け入れるよう説得されるのですが、その



肩書きに伴う身分、すなわち修道院長の身分を否定し、階級や富みや身分による差別のない愛に満ちた関係を共同体の中に築こうとしました。この態度は、非暴力の生活の基本であると同時に、積極的な非暴力の実践の基本でもあります。当時としては過激とも言えるこの出発は、現代の私たちに多くのことを考えさせてくれます。

この共同体においては、キリストの貧しさを受け入れるということは、神としての「身分」にこだわらずに、人間の条件をすべて、その美しさと弱さを含めて受け入れられたキリストに従うということなのです。そのような共同体においては、各人の持つ美しさやもろさは、すべての人によって分け隔てなく受け入れられるべきものでした。この共同体の最年少者や最新の入会者も、毎週の定例集会で他のすべての姉妹たちと同じように発言する権利を持っていました。

皆の同意を得ることが意思決定の方法でした。共同体には召使もいなければ、特別室もスイートルームもなく、階級差別もありませんでした。

クララもフランススコも、共同体とか共同生活という用語を使っていません。彼らが言っていたのは、兄弟姉妹という具体的な関係でした。彼らが大切にしていたのは、「共同生活」よりも兄弟姉妹としての関係でした。それぞれの会の創立者が提案した生活様式は、この兄弟姉妹という関係性を支え、守るものだったので、クララは自分のことを常に兄弟姉妹との関係において捉えて

心の貧しい人々は、幸いである。天の国は祖の人たちのものである。祈りや信心業に励み、自分の体に厳しい断食や苦行を課しながら、自分の体への侮辱だと思われるただひと言のために、あるいは、自分から取り上げられた些細なもののために、躓いて、すぐに心を乱してしまう人が大ぜい居ます。こういう人は心が貧しくありません。なぜなら、本当に心の貧しい人は、自分自身を憎んでおり、自分の頬を打つ者をも愛しているからです。

訓戒の言葉 14

いました。すなわち、姉妹たちの小間使いとして、フランシスコの小さな植物として捉えていたのです。彼女はプラハのアグネスへの手紙の中でこのように書いています：「私と他の姉妹たちの不完全を、あなたは見事に補っていらっしゃる」、「私と私の姉妹たちを思い出してください」(プラハの聖アグネスへの第3の手紙、4と42)。

クララはそうしようと思えば、アッシジの城壁の中で、自分の家庭で家族や友人、召使に囲まれて悔い改めの生活を送ることもできたのです。しかし結局、彼女は市街を離れ、奴隷や農民、商人、貴族など様々な身分の女性と一つ屋根の下で愛に満ちた生活を始めました。それは、当時としては、新しい社会組織でした。

今日の積極的な非暴力運動の多くは、このような包括的で尊敬に満ちた関係を育む社会的・経済的組織を作り出すことを目指しています。たとえば、多様性の訓練、搾取するのではなく相互の利益を考えた経済活動、地球や被造物全体を大切に土地改革などです。

現代の実例

多民族共同体

スリランカ管区にあるマリアの宣教者フランシスコ修道会は、この数年間、現代の民族紛争に対して民族間の調和をフランシスコ的に証しするために、多民族共同体の中で暮らしています。2～3年前、タミール人の占める割合が圧倒的に多い東海岸で緊張が高まった時、私たちの共同体にはタミール語を話すシスターが三名とシンハラ語を話すシスターが一名いました。その時、過激派のタミール人たちがシンハラ族は全員東海岸から出てゆけと命令したのです。命令に従わなかった人々は、武力で強制的に退去させられました。過激派



のタミール人たちは、シンハラ族のシスターが私たちの共同体の中にまだ残っていることを知ると、そのシスターを即刻追い出せ、さもなければ修道院に危害を加えると脅しました。タミール語を話すシスターたちは、そのシスターを退去させることを拒みました。シスターたちの安否を気づかった司教は、せめてここしばらくの間だけでも、そのシスターを南部に移してはどうかと勧めました。共同体のシスターたちや近所の人々(タミール人)はみな、そのシスターのことは自分たちで守るからと言って、彼女が留まることを希望しました。危険な選択ではありましたが、本人が留まることを希望したので、管区長も彼女が留まることに同意しました。数ヶ月が経ちましたが、何ごともしりませんでした。状況が改善し、宣教活動はそれまでどおり続けられました。何よりも、この共同体は戦時下で並々ならぬ勇気と福音的価値観を証しすることに成功したのでした。

パプアニューギニアでの平和活動

フランシスコ会みことばの母管区(The Mother of the Word Province of Franciscans)のシスターたちは、2000年11月に、非暴力の愛という福音的価値観をより完全に生き抜くという誓いを立てました。彼女たちにとって問題は、「平和に満ちた非暴力の世界という理想を会員たち一人一人の中に、また他の人々の間に生き生きと保つにはどうすればよいか」ということでした。シスターたちは二つの可能性を考え出しました。すなわち、非暴力の生活を実践する技術を身に付けること、そして、民族的背景や階級、富みなどが不正を生む対立要因となるようなシステムを打破するために、非暴力を生き、実践する方法を学ぶように身近な人々に働きかけてゆくというものです。このテーマは、パプアニューギニア宗教家連合によって取り入れられ、すべての地域で宗教家たちがこの運動に献身的に取り組んだのです。

このフランシスコ会のシスターたちはオーストラリアのAVP「暴力に代わる方法を考える会」(Alternatives to Violence Project)に連絡を取りました。AVPは、独創的な非暴力の手段を

用いるよう人々を励まし、訓練することで暴力を減らしてゆこうとする国際的なグループです。今では、シスターたちは AVP プログラムの修正版を用いて独自の研修会を行っています。学習は体験学習と言ってよいもので、最終的には非暴力の生き方を目指して歩み出すようになります。シスターたちはこのプログラムを青年グループや、教区の運営に携わるスタッフグループ、カウンセリングチーム、家族計画チーム、小学校や中学校などにも広げて行きたいと考えています。

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、「分裂なき相違」を認めようとする行動や意識の実例がありますか。



第3章 非暴力の介入、出会い、そして第三の道： 聖フランシスコとグッピオの狼

聖フランシスコが、グッピオの町に滞在していた時のこと、たいそう価値のあるものとして、長く人びとからほめそやされるようなことが起こりました。そのころ、グッピオの町の付近に、一匹のそれは大きく気の荒い狼がいて、飢えのため家畜はおろか、人間までも襲って食い殺すまで凶暴になっていました。その町の人びとはみな、これを手のほどこしようのない天災のように思い、それはしばしば町の近くまで出てくるので、町の外へ出かける時は、まるで戦いにでも行くように武器をたずさえていました。狼を恐れるあまり、この町に住む人は誰一人として、あえて町の門から外に出ようとはしませんでした。

その時、グッピオにいた聖フランシスコは、これを知ると、同情を覚え、町の外へ出かけて、狼に会う決心をしました。ところが、これを知った市民たちは彼に向かって、このように言いました。「兄弟フランシスコ、気をつけてください。門の外へ出るなど、もってのほかです。おおぜいの人を食い殺したあの狼は、きっとあなたに襲いかかり、あなたを殺してしまうでしょう！」しかし、聖フランシスコの方は、すべての造り主であられる主イエス・キリストに全幅の信頼を寄せていました。彼はたてやかぶとで身を守らずに、十字の印をして身を固めると、一人の仲間をお伴に、町の外へ勇敢にも出かけてゆきました。

やがて間もなく、このおどろくべき出来事を一目見ようと、町の外へ出てきたり、高い所に上ったりしていたおおぜいの人々の目の前で、怒り狂った狼が、大きな口を開けて聖フランシスコと、その仲間の方へ駆けてくるのが見えました。聖人は、それに向かって十字の印をしました。すると、彼とその仲間に近づくほどに、神の力がこの狼の上に効き始め、やがて駆ける速さをゆるめさせると、その恐ろしい口までも閉じさせてしまいました。そこで、聖フランシスコは狼に声をかけると、「わたしのもとに来なさい、

兄弟狼よ。キリストのみ名において、わたしやほかの人にも悪さをしないように命じます」と、言いました。この命令が出されると、すぐに狼は頭を低くたれ、まるで子羊に化けてでもしたように、聖人の足元にごろりと横になりました。

そこで聖フランシスコは、自分の前に横になっている狼に向かって、このように話して聞かせました。「兄弟狼よ、あなたはこのあたりで、とんでもない悪いことをやりました。あなたは、神のお造りになられたものを情け容赦なく痛めつけ、恐ろしい罪を犯したのです。……ですから、あなたには、極悪な盗びとや人殺しと同じように、死刑こそがふさわしいのです。だから、みなが口をそろえて、あなたをののしり、非難するのも無理からぬところがありますし、事実、この町あげてあなたを、敵と見なすのも当然なことのように思えます。ところで、わたしは、あなたとあの人たちとの間の仲直りを考えています。それは、あなたからこれ以上誰もが危害を加えられないこと、また、あの人たちがあなたの過去の犯罪をことごとく赦すこと、そして、人も犬もこれからあなたをいじめないと言うことで。これを聞くと、狼は体と尾と耳を動かし、さらにこくりと首を振ってうなづくことで、聖人が言い聞かせたことを喜んで受け、それを固く守る意思のあるところを見せました。それで、聖フランシスコはことばをつづけて、つぎのように話して聞かせました。「兄弟狼よ、あなたがこの仲直りを喜んで受け、しかも守ると言うのですから、わたしからこの町の人たちに、あなたが決してひもじい思いをしないよう、あなたが生きていくかぎり、彼らが毎日あなたに食べ物を与えるよう、たのむことを約束します。と言うのも、わたしは、あなたがひもじさにたまりかね、このような悪いことをしたのを知っているからです。

ところで、兄弟狼よ、わたしがあなたのために、このような好意をみなさんから得てくるのですから、この後は決して家畜も人も傷つけないと、わたしに約束してもらいたいです。あなたは、それを約束するでしょうね。」狼は、こくりとうなづくことで、聖人が言い聞かせたことを守る約束の印にかえました。そこで、聖

フランシスコは、「兄弟狼よ、イエス・キリストのみ名において、あなたが今、怖がらずにわたしと一緒に町へ行き、主のみ名によって仲直りをするように命じます。すると狼はすぐに、まるでおとなしい子羊のように、聖フランシスコのそばにぴたりとつくと、とことこ歩き出しました。

聖フランシスコの小さき花、21

考察

狼の牙は本物です。狼が殺した人間も実在の人物です。狼が町に加えた危害も本当の話です。

グッピオの町を襲った恐怖は真に迫っています。狼の恐怖は現実のものでした。狼を恐れて町の門の中にこもっていたのも、また、門の外に出かける時には「まるで戦いにでも行くように」武器をたずさえていたというのもうなずける話です。

問題は、当事者双方が互いに相手に対して取っていた威嚇行動は紛争を解決しないということでした。それどころか、威嚇は状況を悪化させるだけでした。町の人々と狼は、暴力を他に頼る手段のない当然で不可避のものとする暴力の連鎖に捕らわれていたのです。お互いが相手の凶暴性に対して怖れを抱いている当事者にとって、暴力と報復的暴力という道筋を辿る以外にどんな道があったでしょう。

アルベール・カミュは、被害者にもならず加害者にもならないことが現代に生きる人間に与えられた課題であると述べています。このフランスの実存主義者より8世紀前の時代の聖フランシスコは、町の人々と世界に対してこの「第三の道」を提案しました。グッピオのエピソードでは、町の人々も狼もどちらも被害者であると同時に加害者でした。この聖人は、言葉ではなくてむしろ身をもって第三の道を示したのでした。聖フランシスコは神の救いの力に全幅の信頼を寄せていたので、当事者双方を癒すために、どちらの社会環境をも超えることができたのです。

町の人々の目から見れば、フランシスコは安全圏と思われる範囲（それも恐怖でいっぱい）を出て、混乱と暴力の領域と思われる危険地帯に足を踏み入れます。一方、狼の目から見れば、フランシスコは食べ物であると同時に、自分を攻撃する町の人々からの威嚇でもあります。しかしながら、彼の大胆な行動 非暴力の介入 は、どちらの思惑をも覆します。彼は、相手も（単に反射的に破壊的なわけではなく）傷ついた部分と聖なる部分を併せ持っていることを示しながら、真実に相手に心を開けば不透明な恐怖のベールを破ることができることを町の人々に示します。彼は狼に、凶暴性に対して凶暴性で対応しないことを決めたのは、別の力、すなわち、強制力ではなく統合的な力があることを示すためであることを教えます。非暴力の神の力に信を置いていたフランシスコの一方的な歩みよりは、狼との一体感を確認すること（狼のことを兄弟と呼んでいること）によって、また、狼の行った暴力行為（町の人々を襲ったこと）を真摯に指摘し、暴力の原因（ひもじさ）を分析することによって、さらに、町の人々と狼双方の必要を満たすような調停案を示し、最後にこのどちらにとっても有利な協定を双方に認めさせることによって、暴力の連鎖を断ち切ることに成功します。この問題の解決に伴い、そもそも狼のひもじさの原因となっていた状況、すなわち、当時のイタリアの各都市で抱えていた人口増大の重荷も改善されつつあったのではないかと思います。

このエピソードは、私たちが人生でしばしば体験する脅威を物語っています。つまり、脅しに対して脅しで対抗しようとする可能性です。これは正しい解決の可能性を破壊するものです。このエピソードはさらに、それまでに見たことのない、あるいは仮に見たとしても現実的とは思えないような「第三の道」を浮き彫り



にしてもいます。非暴力による平和作りは、いつも成功するとは限りませんが、人間性の喪失や破壊という慢性的な行き詰まりを打開する方策を絶えず追い求めているのです。そのような平和作りは、敵対する者同士の間には内在する共通点を探し出すのです

彼らがどれほど異なった者であっても、です。このエピソードに見られるその確信は、人間と動物という異なった種の間には解決がもたらされたという点で際立っています。これは、数世紀後に「分裂なき相違」を認めようとして闘ったガンジーの積極的な非暴力の思想を裏付けるものです。

グッピオの町は、フランシスコの平和作りを記念としてその制度に残っています。たとえば、1970年代にグッピオは自らを「非核地帯」と宣言し、町の役人たちはさまざまな平和運動に積極的に取り組んでいます。

現代の実例

なぜフランシスコはベツレヘムの生誕教会に留まっているのか

2002年の春、イスラエル・パレスチナ間の紛争が激しさを増していた時に、フランシスコたちはベツレヘムの包囲された生誕教会に5週間留まることを決意しました。兄弟姉妹たちが紛争の最中に留まることにしたのは、そこが自分の家であり、パレスチナ人もイスラエル人も恐れていなかったからです。彼らは、この聖地の忠実な守護者としての責任を感じていました。聖地を守ることは教会からフランシスコに与えられた任務であり、国際法の保護を受けていました。しかし、留まることにした主な理由は、武装したパレスチナ・イスラエル両陣営の直接の武力衝突を回避し、キリスト教の聖地に死傷者を出さないようにするためでした。兄弟姉妹たちは両陣営に対して心を開き、敬意をもって接したので、その後の膠着状態を打開するための外交的な和平工作において重要な仲介役を果たすことができました。

ラテン・アメリカにおけるフランシスコの平和作り

フランシスコは長い間、非暴力の介入、連帯、同伴ということを試みてきました。ラテン・アメリカでは、多くのフランシスコが人権運動に参加しています。コロンビアにあるフランシスコ会サン・パブロ管区では、兄弟たちが「民主主義計画」と市民参加クラスを組織していますが、こんなことがありました。エド・ダン OFM によ

平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子とよばれる。神のしもべは、自分自身のうちにどの程度の忍耐と謙遜を持っているかを、万事が順調にしている間は、知ることができません。しかし、自分を喜ばせてくれる筈の人々が、正反対のことをする時が来た時、その時に示すものが、神のしもべの持っている忍耐と謙遜であり、それ以上ではありません。

訓戒の言葉 13

ると、ある農村で働いていた兄弟たちが民兵に脅されて村から退去しました。それから間もなくして、民兵たちはその地域の民間人の指導者を大勢暗殺したのです。そのフランシスコ会の管区は緊急会議を開き、今後兄弟たちが脅されて強制的に退去させられた場合は、必ず別の兄弟グループがそこにいるようにすると決めました。この「永続的に存在する」という方針は、暴力と人々に対する攻撃を極力減らしたいという兄弟たちの願いに根ざしています。

一方、ブラジルの多雨林で働くフランシスコ会のシスターたちは、暗殺された労働界の指導者チコ・メンデスの活動を継続しています。彼女たちは多雨林の生態系の保護および地元住民の人権と経済利権の保護のために働いています。

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、正義と平和のために非暴力の介入を行っている実例がありますか。

第4章 多元主義、原理主義、そして積極的な非暴力： 聖フランシスコのスルタンとの出会い

これらの兄弟たちの師、会の創設者でもある者はフランシスコと呼ばれている。彼は私たちの陣営にやって来て、信仰の情熱で燃え、敵の陣営に入ってゆくことを怖れませんでした。数日間彼は神の言葉をサラセン人に宣べ伝えましたが、ほとんど成功しませんでした。スルタンは特に彼を呼びつけ、エジプト王である自分のために主に祈るように彼に願いました。神はどの宗教が彼にとってよいものであるかを示したのでしょうか。

ヴィトリのヤコブス書簡 1220 年より

考察

聖地巡礼の話は、フランシスコのほとんどの伝記の中に書かれています。この巡礼についての記述は1321年のアンジェロ・クラレノの著作の中に初めて出てきます。兄弟 Gwenole Jeusset OFM の指摘するところによると、フランシスコの生涯におけるこの出来事の記述の多くは、13世紀の聖人伝作家たちの反イスラム教的な態度の影響を色濃く受けているようです。そのため、このエピソードを紹介するにあたり、私たちは、初期の諸フランシスコ伝を使用するのをやめて、ヴィトリのヤコブスの当時の記録を引用することにしました。

1212年、フランシスコはシリアに向けて出発しますが、船が難破してしまいます。その翌年、今度はモロッコに向かいますが、ひどい病気になり、スペインまでしか辿り付けませんでした。1219年フランシスコはついにエジプトに渡り、イスラム教の人々に会うことができました。エジプトに到着するとすぐ、フランシスコは前線に赴く許可をもらってダミエッタに行き、エジプトのスルタン、マリク・アル・カミルと話をしました。当時アッコン（イスラエル北西部の都市）の司教であったヴィトリのヤコ

ブスは、サラセン人たちが、自分はキリスト教徒だがスルタンのもとに連れて行って欲しいと頼んだフランシスコを捕虜にしたと書いています。フランシスコを聖人のように感じたスルタンは、彼を丁重に扱い、数日間もてなしながら、彼の話に注意深く耳を傾けたのでした。

ヴィトリのヤコブスによると、スルタンはフランシスコの説教によってスルタン側の兵士たちが改宗するのを恐れて、彼をキリスト教徒の陣営に送り返したそうです。別の二つの記述は、スルタンが彼の霊的顧問団からフランシスコを殺したほうがよいとの助言を受けていたと伝えています。スルタンはこの助言を退け、フランシスコに身の安全のために立ち去るように、しかし自分のために祈って欲しいと頼みました。「どの掟と宗教がより神のみ旨にかなっているかを神が私に示してくださるように、私のために主に祈ってください。」スルタンはフランシスコに、当時キリスト教徒が立ち入ることを禁止されていた聖地への安全通行証を与えたと言われています。

この出来事は、聖地への「勇敢な巡礼」の話でもなければ、キリスト教への改宗を成し遂げた「成功」物語でもありません。「フランシスコはご托身を信じていなかった別の宗教の信奉者に会いに出かけました。彼が行なった巡礼は石の建物を訪れることではなく、人々の心に触れることだったのです。」（「他の宗教、特にイスラム教との関連におけるご托身」、Gwenole, OFM, 2001年5月にアッシジで開かれた律修第三会国際協議会総会でのスピーチ）

他の人々と出会うことによって喜んで自分を変えようとする心構えは、非暴力の実践に欠かせない要素です。スルタンとの出会いがフランシスコの霊性に、また、彼がイスラム教徒のもとに行こうとする兄弟たちの使命を理解するうえで、深い影響を与えたことは、兄弟たちを宣教に派遣する際の指示（第一会則16章）に見て取れます。しかしながら、兄弟たちのもとに戻って来たフランシスコは自分の体験を少ししか兄弟たちと分かち合うことが

できませんでした。なぜなら、キリスト教徒の考え方は、兄弟たちも含めて、イスラム教の人々とあまりにも似通っていたからです。フランシスコの時代にイスラム教徒のもとに行って説教をし、彼らを改宗させようとした最初の兄弟たちの熱心な話を読むと、フランシスコの指示が正しく理解されていなかったことがわかります。

当時のキリスト教文化とイスラム教文化の出会い、中世の血なまぐさい戦争を引き起こし、それは長いこと続きました。当時の多くのキリスト教徒は、イスラム教徒のことを悪魔に仕える人々だと思い込んでいました。兵士たちはイスラム教徒の手から「聖地」を力づくで奪い取ろうとし、宣教師たちはイスラム教徒を地獄から救い出そうとしました。十字軍はこの二つのきわめて異なる文化を接触させ、その境界をうやむやにしたのでした。

このことは、現代の世界に見られる経済のグローバル化ともよく似ています。何世紀にもわたって人間の体験を形成してきた異なる宗教的伝統が、誤解を生むような方向で互いに影響を及ぼすようになったのです。マイケル・ハドリーはその著書「正義の木」(*The Justice Tree: Multifaith Reflection on Criminal Justice*)の中で、「異文化間の緊張は正義を育むのに失敗すると、国際的な紛争に発展する。このことは現代の私たちが直面している通りであり、通商貿易が不安定な時にはなおさらである」と述べています。

宗教的伝統は本来紛争よりも平和に貢献するものであるはずなのに、原理主義は異なる宗教的伝統を奉ずる人々の間に紛争を引き起こします。現代においては、これらの宗教的伝統の信奉者たちは、人間の本性とか、権力の行使や暴力の使用、人間同士の争いの解決などの重要な問題について、根底から考え直すことを求められています。この点で、フランシスコのスルタンとの出会いは非暴力について私たちに多くのことを考えさせてくれます。真実は一人の人のものでもなければ、一つの伝統のものでもなく、すべての人の心の奥底にあるものだという認識は非暴力の基本で

す。相手の言葉に誠実に耳を傾け、真実が語られたならば喜んでそれに合わせて自分を変える姿勢が非暴力の実践には必要です。フランシスコとスルタンは、異なる伝統の中にある真実を共に探そうとする意欲を持っていました。

積極的に相手を受け入れ尊敬する姿勢を養うよう訓練することも積極的な非暴力の一部です。この姿勢を探求して行くと、私たちの宗教的伝統の基礎となっている教えをただ単純に字義どりに理解するだけでは不十分だということがわかります。研究と対話と観想を続け、いのちと真理の源である偉大な叡智である方に祈りに満ちた注意を向けることが必要になります。同時に、フランシスコとスルタンがその出会いにおいて見せた礼儀正しさも必要です。

現代の実例

モロッコでの生活

フランシスカンたちは聖フランシスコの時代からモロッコに住んでいます。何世紀にもわたって重視されてきた努力目標の一つは、イスラム教徒の間で小さき兄弟として礼儀正しく暮らすことです。大切なことは、そこに存在することであって、人々を私たちの宗教に改宗させることではないのです。相互理解と友情を深めることのほかにフランシスカンたちが試みていることは、特に教育や健康の分野でさまざまな計画を推進することによって、地元の人々の総合的な発展に貢献することです。メクネス(Mecnes)では、兄弟たちはメディナや古代都市で地元の人々に囲まれてアパート暮らしをしています。地元にすっかり溶け込んでいるのです。人々、特に若者たちは、自由に兄弟たちを訪れ、図書館を利用したりしています。図書館は彼らの生涯教育に最適の場となっています。マラケシュでは、さまざまな開発計画についてモロッコ人の非政府組織に協力する諮問機関の設立・発展のために一人の兄弟が働いています。この諮問機関はフランシスカン・ハウスでモロッコ人の手によって運営されています。

アジアにおけるフランシスカンの非暴力：一つの管区

フランシスコ会のある管区はアジアで非暴力の抵抗を実践していますが、兄弟たちの活動を妨げないために、その名前を明かすことはできません。その管区の方針は、宗教的・社会的・政治的自由のための場を提供することです。兄弟たちは、政府を公然と批判したり、自分たちの立場を表明したりするたにに対決姿勢をとるということをしていません。彼らは、行政当局と話し合い、目標を達成するためにたゆまぬ努力を続けています。地域社会の組織に参加し、アイデアを出したり、必要な場合には建設的な批判をしたりしますが、決して対立する相手を軽蔑することはありません。兄弟たちの社会計画のほとんどは、行政当局と協力して行なわれています。彼らは状況が変わって新しい政治体制が生まれるのを座して待っているわけではありません。完全な社会に生きてはいないことを嘆くのではなく、喜びをもって今日のフランシスカンとしての召命を生きています。このような態度でいると、政治的変動も教会、特にフランシスカンにとって、自分たちの本来の召命を見直し、行動を改めるよいチャンスであることがわかります。

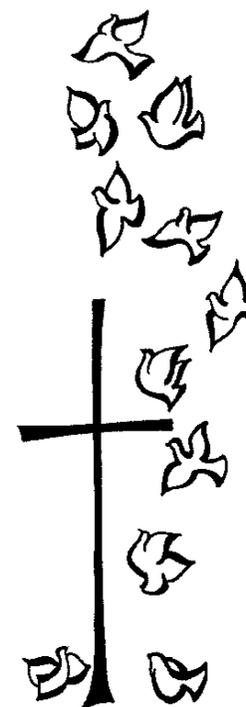
Neve Shalom / Wahat al-Salam: 平和作りの実践

Neve Shalom / Wahat al-Salam とは、イスラエルにある共同体・学校・平和作り計画の総称です。パレスチナ人とユダヤ人の合同共同体である Neve Shalom / Wahat al-Salam は、この20年間パレスチナ人とユダヤ人を団結させ、協力させることに成功しています。数日のうちに参加者たちは、出会いの三つの段階を辿ります。最初の段階は、互いに相手の人間性を認めること。第二段階は、グループ間の力の差異を見つけること。たとえお互いの人間性を認め合っても、構造的な不正という暴力は存在するし、そのことを解決しないならば真の平和はありえないことを認識すること。そして最後の第三段階で、参加者は30年後の将来を想像し、将来を共に築いてゆくにはどうすればよいかを考える

のです。どちらの共同体もそこに踏みとどまっています。ですから、正義と平和に満ちた社会を互いに協力し合って建設できるかどうかは彼ら次第なのです。

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、非暴力に取り組んでいる実例がありますか。



第5章 積極的な非暴力と人を癒す正義：モンテ・

カサーレの三人の強盗

そのころ、この地方を荒らし回って悪事を重ねる、三人の悪評高い盗びとがいました。ある時のこと、この三人が兄弟たちの住まいにやって来て、院長の兄弟アンジェロに向かって、何か食物をくれるようにたのみました。すると、院長は、彼らをきびしくしかりつけました。・・・三人は頭にきて、かんかんになって出てゆきました。ところで、その同じ日のこと、聖フランシスコが、仲間と一緒に物ごいをしてもらった、一袋のパンやぶどう酒の容れ物をついで戻ってきました。そこで、聖フランシスコは、院長が盗びとたちを追い払った話を本人の口から聞くと、きびしい口調で、このように言いました。「あなたはひどい仕打ちをしたものです。なぜなら、ふつう罪びとというのは、ひどいことばでのしるより、聖なるやさしさによって神のもとに帰ってくるのです。・・・とにかくあなたは、イエス・キリストのお手本とは反対な、思いやりに欠けたことをしたのですから、聖なる従順のもとに、わたしが物ごいしてきた、このパンの袋とぶどう酒の容れ物をもって、今すぐその人たちの後を追うように命じます。行って、その人たちを見つけたなら、このパンとぶどう酒をその人たちに差し上げなさい。

それから彼らの前にひざまずき、へりくだって自分のひどい仕打ちを心から告白しなさい。その後で、わたしの名において、これ以上悪いことはせず、神を恐れ、隣人に害を与えないよう、その人たちに願いなさい。それで、その人たちがこのようにするなら、わたしが彼ら三人の必要なものの面倒をみ、飲み食いのためいつでもお世話をする、と約束したことを彼らに話しなさい。そして、このことをへりくだって彼らに伝えたなら、ここに帰ってきなさい。」

院長が、聖フランシスコの言いつけをはたすため出かけてゆく

と、聖人は祈りはじめ、あの盗びとたちの心をやわらげ、彼らが悔い改めて回心するよう、主に願っておりました。従順な院長は一行を見つけると、彼らにパンとぶどう酒をすすめ、聖フランシスコが言いつけた通りに話しました。・・・

三人は、急いで聖フランシスコのもとに行き、彼につぎのように申しました。「父よ、わたしどもは、たくさんの罪を犯したので、はたして神からおんあわれみをいただけるかどうか、すごく心配なのです。でも、神がわたしどもをあわれんでくださる、という確信をあなたが持っておられるのでしたら、わたしどももまた、あなたと一緒に贖罪をし、また、あなたからの言いつけに、何でも従う覚悟をしています。」

このことばを聞いた聖フランシスコは、感動して温かく三人をもてなし、靈感に満ちた、たくさんの例えをひいて話しながら、彼らを慰め力づけ、しかも、彼らが必ずや、神のあわれみをいただくことができると保証しました。

聖フランシスコの小さき花 26 より

考察

この物語は、フランシスコの非暴力の特徴を示しています。すなわち、相手の心をやわらげる礼儀正しさ、そして、神が愛してくださっているように愛したいという動機と、その愛を具体的な目に見える形で表そうとする姿勢です。グッピオのエピソードの時と同じように、フランシスコはほとんどの強盗がひもじさから盗みを働くことを知っていたので、三人の強盗に食物を与えることを約束します。彼は強盗を追いかけて見つけるように命じた兄弟たちを通して、このことを行ないます。彼の非暴力は具体的で現実的であり、暴力を正当化するいかなる理由も排除しています。彼の行動の真意は単なる戦略的なものではありません。何よりもまず、彼は福音書に見るイエスの模範に従いたかったからであり、それが非暴力の愛を実現する効果的な方法だと信じていたからです。

この物語の中には、人を癒す正義という考え方が示されています。物語を読み進むにつれて、フランシスコの非暴力の対応が無条件の尊敬に満ちた思いやりから生まれていることがわかります。強盗に対する彼の態度は、「身から出た錆」という考え方とは無縁のもので、そこには罰するという考えはなく、あるのはただ、強盗たちに悔い改めの気持ちを起こさせ、地域社会に復帰させてやりたいという願いだけです。悔い改めは罰とは無関係であり、神の愛と他者の愛に心を開くことなのです。そのことに気づきさえすれば、私たちの生活は一変することでしょう。

人を癒す正義という

考え方によれば、犯罪とは人々を傷つけ、人間関係を損なうことを意味します。従って、罰することよりも、被害者、加害者双方の傷を癒すことに重点が置かれます。この考え方の目指すところは、ものの見方や構造、ひいては人間を絶えず変えてゆくことなのです。法律違反を罰することを目的とする因果応報的な考え方

ところで、そこへ行く兄弟たちは、二つの方法をもって、彼らの間で霊的に生活することができる。一つの方法は、口論や争いをせず、神のためにすべての人に従い、自分はキリスト者だと宣言することである。すべての兄弟は、どこにいても、主イエス・キリストに自分を全く献げたこと、自分の体を渡したことを覚えていなければならない。そして主への愛のために、見える敵にも見えない敵にも自分をさらさなければならない。主が次のように仰せになっているからである。「私のために命を失う者は、それを救って永遠の命にあずかる。」義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。人々が私を迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。一つの町で迫害された時は、他の町へ逃げなさい。私のために人々から憎まれ、ののしられ、迫害され、追い出され、非難され、汚名を着せられる時、また、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられる時、あなたがたは幸いである。その日には喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。

第一会則 XVI, 6, 10-20

とは一線を画します。ニュージーランド癒しの正義ネットワークの委員長 Jim Considine (national Coordinator of the New Zealand Restorative Justice Network) は、人を癒す正義という考え方を「懲罰から和解へ、加害者への復讐から被害者の癒しへ、疎外と過酷さから共同体と健全な状態へ、否定と破壊から癒しとゆるし、そして寛容さへと変わってゆく思想である」と述べています。(*The Justice Tree*)

癒しの正義ネットワークは、市民社会に新しい気づきをもたらすために、また、刑事司法制度に構造改革をもたらすために、多くの国々で活動しています。弾圧や武力衝突によって分裂させられた国家や地域内に真実と和解の委員会を設立しようとの試みは、この正義は人を癒すものであるという考え方を反映するものです。南アフリカ真実と和解委員会のメンバー、Pumla Gobodo-Madikizela は「加害者の真摯な謝罪は、被害者を積年の恨みと憎悪から解放する決定的な瞬間となるはずである」と述べています(*The Justice Tree*)

現代の実例

フランシスカン・メッセンジャー

住民の大半がシンハラ人であるスリランカ、モラトゥワで私たちマリアの宣教者フランシスコ修道会は学校を運営していますが、2～3年前にシスターの一人が生徒たちの間に「聖フランシスコのメッセンジャー」という組織を作りました。この組織の会員たちは定期的に会合を開き、国が置かれた現状の中でどのようにしてフランシスカンの価値観を体現してゆくことができるかを一緒に考えています。昨年のクリスマスに、会員たちは生徒たちに呼びかけてたくさんの役に立つプレゼントを集め、紛争中の東海岸地域の人々に送りました。会員たちはその人々と文通も始めました。生徒たちは全員タミール語を習っているのです。今ではタミール語で自分の気持ちを伝えたり、文通したりすることができます。現在彼らは東海岸の何人かの生徒たちと会合をもつ計画を立

ています。彼らはタミール人の生徒たちに南部を訪問してくださいと招待状を送っています。そうすることによって彼らは、ここ数年の民族紛争のためにできてしまった壁を取り除き、シンハラ人とタミール人という二つの部族の間に愛と非暴力、理解と尊敬の新しい関係を築きたいと考えています。

ピース・コート (平和裁判所)

米国サウスダコタにあるローズバッド・ティートン族保護特別保留地について、長老協議会 (an Elder Legal Conference) は、伝統的な問題解決精神に近い調停案をまとめるために、伝統的な紛争解決方法を探りました。彼らは最近「ピース・コート」(平和裁判所) というものを設立して、調停者となる最初のグループを訓練しています。何人かの訓練生の話では、このシステムは大昔からティートン族が用いている *tiyospaye* というモデルにとてもよく似ているということです。訓練生たちは、これをティートン族の社会制度を築く第一歩であり、人々を結束させるのに役立つ運動であると考えています。「ピース・コート」は紛争当事者双方に、紛争解決を正式の法廷に委ねる代わりに、紛争解決のために熟練の調停者を交えて対話するチャンスを提供する予定です。

米国カリフォルニア州サンフランシスコの貧民街は地域共同体というよりも犯罪の温床と考えられてきましたが、最近その地区が癒しの正義のモデルとなることを目指して活動をしています。人々はこれを「コミュニティー・コート」(地域共同裁判所) と呼んでいます。この「コミュニティー・コート」は、意見の対立する住民を結束させることにより、地域共同体の育成に一役買うことになるでしょう。そして、調停者として訓練を受けた隣人たちは、当事者双方を尊重しながら、関係者全員の必要を満たすことができるような解決策を見いだすよう双方を導くことにより、紛争解決に貢献することができるでしょう。

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、人を癒す正義が可能であることを示す行動や意識の実例がありますか。



第6章 聖クララの断固とした粘り強さ

オスツィアの司教が、クララの病気が重くなったことを聞いて、キリストの花嫁を見舞うために、ペルージャから急ぎはせつけたのである。彼は実に、その役職によってはクララの父、その配慮によっては教育者であった。彼は最も純粋な愛によって常に彼女の誠実な友であった。彼は至聖なる聖体の秘跡によって彼女を力づけ、他の姉妹たちの為には励みになる救いに有益な話で力づけたのであった。

クララは唯一のこと、つまり自分と他の姉妹らの靈魂を、キリストのみ名の為に彼に委ねたいということ、涙ながらに、父である彼にへりくだって願った。だが実は、それよりもまず清貧の特権を、教皇と枢機卿達が確認して下さるように切に願い求めたかったのである。

修道会のかの忠実な援助者ライナルドは、かつて自分が口頭で約束してあった通り、現実にそれを果たしたのであった。・・・今はもう世を去られたインノセント四世は、枢機卿らを伴ってキリストのはしためを見舞うためにはせつけた。・・・それからクララは、教皇にすべての罪の許しを願った。しかし教皇はそれに応えて、「私こそ、もっと多くの赦しが必要なではありませんか！」と言った。それから、彼はクララに完全な許しの恵みと豊かな祝福の恵みを授けた。

クララの伝記、40、42

考察

クララの「会則」が成立するまでには、サン・ダミアーノにおいて貧しい婦人たちと共同生活を送った彼女の生涯と同じくらい長い期間がかかっています。実際、クララの書いた会則が認可されて後も、一つの点が認可の対象から外されていました。それは、彼女にとって最も大切な「清貧の特権」でした。ようやく、彼女

の亡くなるわずか数日前に教皇自ら彼女を見舞い、この所有物を持たないという徹底した清貧の生活を認可したのでした。

積極的な非暴力に不可欠の人間関係を維持するためには、反対する相手に敬意を持って接することが必要です。Sr. Brieghe O'Hare, OSC はクララの基本的な態度について次のように述べています。「人間としての、しかも最も弱く傷つきやすい時の自分や兄弟姉妹をまるごと受け入れて、その中に神の姿を認めることであった」(the Suore Francescane Insegnanti General Chapter Address, Rome, October, 1999)。そのような態度が反対者に敬意をもって接する際の基本です。

クララは神の思し召しから決して目を離さずに対話する能力に長けていました。そのお陰で、クララは自分と姉妹たちのためにふさわしい「会則」をいただくまで粘り強くやり通すことができたのです。この会則の問題については、彼女は長い年月をかけて何代もの教皇や後には教皇になった枢機卿とも交渉しています。交渉に当たっては、誰とも対話を重ね、姉妹たちの識別や、生活体験、召し出された道に対する確信について話しました。クララと姉妹たちは与えられた「会則」の指針を試みて暮らしていましたが、自分達の体験や主の呼びかけにも耳を傾けていました。そうして、自分達の生活様式を守る決意を新たに表明するのです。

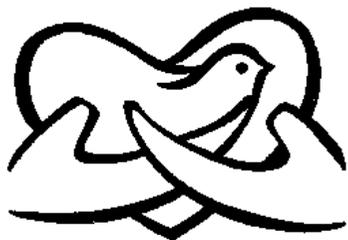
この体験から、クララはもう一人の姉妹であるブラハのアグネスに、彼女が召し出しを感じている生き方を権威のある人が修正しようとする時、自分の対応を決めるための識別方法を教えました。クララがアグネスに宛てた第二の手紙は、非暴力の実践に必要な識別のプロセスについて述べています。ガンジーも、真理の探究について語る時、同じようなプロセスについて述べています。特別な状況に置かれた人々の知恵や、徹底的な状況分析、そして自分の信仰の中に示される「知恵」を利用することによって、人やグループは「持久力」をもって非暴力の闘争に参加することができます。この「持久力」とは、長期にわたる断固たる粘り強さを支える力のことです。

現代の実例

Irene Laure の和解への道程

和解に至る非暴力のプロセスは通常ゆっくりと展開します。一生涯をかけて取り組むとか、次の世代にまで引き継ぐほどの覚悟が必要です。憎悪が何世代にもわたって受け継がれることは私達も知っていますが、愛も世代から世代へと形を変えて受け継がれてゆくことを忘れてはなりません。

Irene Laure の話はそのよい実例です。第二次世界大戦後フランス人とドイツ人を和解させようとした彼女の活動は、新しい戦後のヨーロッパ文化を築く上で大きな影響を与えました。世代も違い、ヨーロッパから遠く離れて暮らしている彼女に会ったこともない人々が、彼女の活動の影響を受け、フランス人とドイツ人の和解を和睦運動の基礎としているのです。



Irene は家族ともども、第二次世界大戦中ナチスの占領下でフランスのレジスタンスのメンバーでしたが、ドイツ人に対して憎悪を抱き、ドイツ人の破滅を願うほどでした。スイスで開かれていた戦後会議の間、彼女は憎悪の念に悩まされ、憎悪が絶えず新たな戦争の原因となるものであることに気づきました。その会議の席上、彼女は憎悪の気持ちを抱えていたのは間違いであったことを公に認め、同席していたドイツ人に赦しを乞いました。

彼女はフランス人とドイツ人を和解させる活動に真摯に取り組みましたが、それはまた、同じ戦争で苦しんだドイツ人を愛し、尊敬しようとする彼女の魂の旅路の始まりでもありました。彼女

は暴力を伴う被害者意識を捨て、人々の心を刷新しようと呼びかける模範となったのです。(この話はマイケル・ヘンダーソンの著書に載っています Michael Henderson, *Forgiveness: Breaking the Chain of Hate*, pp.145-150.)

20年に及ぶ核実験との対決

1982年に聖フランシスコの生誕800年祭を準備するに当たり、小さき兄弟会の会員たちはこの重大な記念祭を特徴付ける行事を考えるよう依頼されました。米国カリフォルニア州のサンタ・バーバラ管区の兄弟たちは、フランシスカンの修道女(Franciscan Sisters of Penance and Charity)たちと共同でフランシスコの平和運動を推進することになりました。中でも最も注目になるのは、1982年四旬節期間中にネバダ核実験場で行なわれた40日間の四旬節の証しという運動です。アメリカ合衆国政府は過去50年間ネバダ実験場で核兵器の実験を行ってきました。徹夜祭は毎日、労働者や科学者、近隣の自治体を招いて実験場の入り口で行なわれ、軍備競争を煽る核実験停止を訴えました。聖週間には、多くのフランシスカンや一般人を含め、大勢の平和活動家が集まりました。多くの人が断食をしました。聖金曜日には参加者たちは実験場まで「十字架の道行き」を行ないました。非暴力の平和作り運動では、大勢の人々がネバダ核実験場の敷地に入り込み、逮捕されました。抗議行動は平和作りと核実験停止を求めて復活祭の朝まで続けられました。

この800年祭のすぐ後に、ネバダ核実験場で積極的な非暴力運動を続けるために、「ネバダ砂漠体験」が組織されました。多くの人々がフランシスカンの兄弟姉妹たちと力を合わせてこの非暴力運動を続けるよう励まされました。彼らは徹夜祭を続け、核実験の停止を訴えると同時に、実験場を作るために土地を追われた西部シヨシヨ二族の人々に土地を返すよう訴えました。毎年さまざまな宗教団体のメンバーがこれらの行事に参加し、徹夜祭を行なっています。何年間もかけて世界中の多くの人々やグループが団結して活動を続けた結果、1992年アメリカ合衆国政府は

核実験の一時停止を宣言しました。しかし小規模の実験は続けられており、この実験場における戦争準備の全面的終結を要求する反核運動が続いています。

多くのフランシスカンや他の宗教の信徒たち、および善意の人々はこの抗議行動を現代におけるアッシジのフランシスコの証しと考えています。聖フランシスコはこの平和作りとすべての被造物の保全を今も促しているのです。

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、正義と平和と和解のために断固たる粘り強さを示した行動や意識の実例がありますか。



第7章 和解のプロセス：司教と市長の場合

フランシスコが病の床にあったそのちょうど同じ頃に、当時のアッシジの司教は市長を破門した。市長はその報復として、司教に物を売ることも司教と如何なる契約を交わすことも禁じるというお触れを、アッシジの市中に大々的に出した。こうして、ふたりは互いに相手を徹底的に憎んだのである。

聖フランシスコは重病であったにもかかわらず、司教と市長の間を執り成す修道者も権力者もいなかったため、このふたりのために心を痛めていた。彼は仲間の兄弟達にこう言った、「司教と市長がこのような憎みあっているのに、誰一人としてこのふたりを和睦させる仲介者がいないというのは、神のしもべであるあなた方にとって大いに恥ずべきことではないか」と。そして、次のような賛歌を作った。

私の主よ、あなたは称えられますように、
あなたへの愛ゆえに救し、病と苦難を堪え忍ぶ人々のために。
平和な心で堪え忍ぶ人々は幸いです。
その人たちは、いと高いお方よ、あなたから
栄冠を受けるからです。

それから、彼は兄弟の一人を呼び寄せ、次のように告げた。「市長のもとに行き、司教の館に市の高官およびできるだけ多くの人々を連れて行くように、私の名前で市長に命じなさい。」

その兄弟が出発すると、フランシスコはそばにいたふたりの兄弟にこう言った、「あなたたちも行って、司教、市長およびその場に居合わせる人々の前で、『兄弟なる太陽の歌』を歌いなさい。私は主が司教と市長の心をへりくだらせてくださることを信じています。ふたりはきっと仲直りし、もとの友情と愛を取り戻すことでしょう。」

司教館の中庭の広場に皆が集まると、ふたりの兄弟が立ち上がり、ひとりが次のように言った、「師父フランシスコは病の床で、被造物を賛美し、主を賛美し、隣人を啓発するために、太陽の歌を作りあげました。師父はあなた方がその賛歌を熱心に聞いてくださることを願っています。」それからふたりの兄弟は歌い始めた。するとすぐに、市長は立ち上がり、恭しく手を組み合わせ、眼には涙をたたえて熱心に、まるで主のみ言葉に聴き入るかのように耳を傾けた。彼は聖フランシスコに全幅の信頼を寄せていたからである。

太陽の歌が終わると、市長は皆に言った、「ありのままを申し上げます。私は主人である司教様を赦すばかりか、誰かが私の兄弟や息子を殺したとしてもその人を赦すでしょう。」そして彼は司教の足元にひれ伏し、司教に「ご覧ください、私は主イエス・キリストとそのしもべフランシスコのために、あなたの思し召しのままにすべての償いをする覚悟であります」と言った。

司教は市長の手を取りながら、立ち上がって市長にこう言った、「私はふさわしい謙遜をもって務めを果たさなければならないのに、生まれつき怒りっぽいのです。どうか赦してください。」そして、ふたりはいたわりと愛の心をもって、互いに抱擁し合ったのである。

居合わせてこれを聞いたすべての人々は、これを聖フランシスコの功德による偉大な奇跡であると考えた。

The Assisi Compilation, 84 (Documents, Vol.II, pp.187-8)

考察

晩年病に苦しんでいたにもかかわらず、フランシスコは「太陽の歌」を書いてからは幸せに満ちていました。しかし、フォルティエニの記録によれば、この幸せな気分も間もなく消えうせてしまいます。「新たな戦争の衝撃で彼の幸福感は消えうせた。・・・アッシジは再びペルージャとの戦争に突入したのである」(569)。

教皇は、他の都市との戦争に参加を求めると同盟を結ぶものは誰でも破門すると警告することによって、この戦争を食い止めようとした。しかし、戦争は続けられました。「誰もが隣人に対して武力をもって蜂起した。城壁は同朋たちの血に染まっていた。城壁の内側にいた者は飢えに苦しみ、外側にいた者は際限のない殺戮に巻き込まれた。・・・アッシジの市長は新しい協定〔同盟〕を守ることを宣言した。それは、教皇と教皇領に対するあからさまな挑戦であった。ガイド司教は市長を破門した」(オポルチュロ、574)。「ガイド司教の破門宣告に市長の怒りは爆発した。市長にとっても、市民にとっても、尊大な司教は自治都市の永久の敵であった」(575)。フォルティーニは市長側の暴力的な応答について次のように描写しています。「サン・ダミアーノから来る愛の賛歌とは奇妙な対照をなす殺人行為の数々、・・・オポルチュロ市長の宣言はテロリストのような血なまぐさい行為に満ちていた。・・・こうした暴力的な人々を駆り立てていたのと同じ苦々しい感情は、司教の側も持っていたのである」(576)。

ここで私たちが問題にしているのは司教と市長との間の単純な誤解や論争でないことは、上記の引用文から明らかです。貴族や新興商人階級、自治都市、教会などを巻き込んだ深刻な社会構造上の問題が絡んでいるのです。神学者であり聖書学者でもあるウォルター・ウィンクという言葉借りなら(*Engaging the Powers*)、私たちが問題にしているのは支配体制上の紛争です。誰が支配するのか、自治都市の主流派かそれとも教皇と同盟関係にある人々か。ウィンクは、支配力を強め、平和的な解決を阻むようなこれらの制度に属する権力が存在すると主張しています。「聖書の世界で人々が『支配の霊と権威の霊』(エフェソ 6:12)と呼んだものは確かに存在していた」とウィンクは述べています。「彼らは、当時の政治的・経済的・文化的制度の中心をなす精神というものを認識していた」(Walter Wink, *Engaging the Powers*, p.6)。「権力の組織的な構図が偶像崇拝的な価値観でできあがる時に生じる体制を私は『支配体制』と呼んでいる」とウィンクは説明しています。

ウィンクはさらに、「社会制度を改革しようとしても、外的な形態と内面的な問題の双方に目を向けなければ失敗に終わってしまう」と言っています。フランシスコはこのことに直感的に気づいていたようです。フランシスコは当時の社会制度が流血と貧困と苦悩をもたらすような悪魔的な体質であったことに充分気づいていましたが、もっと根の深い精神的な問題にも気づいていました。それは、暴力への渴望であり、神が創造された生きものに対する畏敬の念の欠如であり、被造物という贈り物に対する感謝の念の欠如でした。

ウィンクは「神が創造された権威の霊は善いものであった。だが、その権威は墮落した。その権威を救わねばならない」と考えています。フランシスコも当時の社会制度の悪魔的な体質に気づきながら、創造の原点に目を向け、神が創造された時の目的にかなう制度を回復しようと努めました。彼はこのことを模範やとりなしによって、また、神の恵みと平和を与えることによって実行しました。フランシスコが生きていた世界は、暴力の世界であり、それは時に「救世のための暴力」と呼ばれて、武力に訴えて混乱状態に秩序をもたらそうとするものでした。このひどい暴力の世界に、フランシスコは非暴力の文化を導入し、平和な状態をもたらすのに貢献しています。ウィンクは福音を支配体制に代わる力と考えています(Wink, p. 110)。フランシスコはこの福音という手段を世界の新しい生活に持ち込んだのです。

このエピソードが示しているように、フランシスコは平和と和解を取り戻すために執り成しをする人が誰もいないことに心を痛めています。そこで彼は、「平和を実現する人は幸いである」との福音の教えに従ったのです。フランシスコは、自分の政治的な影響力(権力者たちから得ている信頼)をとりなしのために行使しました。ガイド司教はこのフランシスカン運動の誕生と発展において

神が悪く言われ、扱われ、或いは冒瀆されるのを見聞きする時、私たちは善を語り、善を行い、そして神を賛美しよう。第一会則 XVII, 19

主要な役割を果たしています。一方、市長はフランシスコの最も熱心な支持者の一人でした。市長の娘アグネスは幼い頃からサン・ダミアーノのクララのもとで生活していました。司教も市長も共に、フランシスコに全幅の信頼を寄せていたのです。

フランシスコの非暴力の介入は巧妙です。彼は「太陽の歌」にもう一節を付け加えています。彼は兄弟たちの一人を市長のもとに送り、市長に司教館に行くように勧めます。そしてもうひとりの兄弟を司教のもとに、司教に心の準備をさせるために送ります。フランシスコ自身は行かずに祈りつづけます。彼はそれから兄弟たちに、集まった人々の前で「太陽の歌」を歌うように命じます。「平和への願いがフランシスコの人々への挨拶であった。それは彼の愛情を込めた最後の言葉だったかもしれない」(580)。このエピソードによれば、市長と司教は心を動かされて大いに悔い改め、互いに抱擁しあったということです。

フォルティニーは次のように記しています。「少なくともこの瞬間においては、何世紀にも及ぶ権力闘争は終わった。・・・人々はフランシスコが奇跡を起こしたのだと言った」(580)。フォルティニーはこの介入によって真の平和がもたらされたと考えています。また他の人々は、在世のフランシスコたちが武器を持つことを拒否することによって平和に貢献したと考えています。教皇グレゴリオ9世は、フランシスコの影響によって世界のこの部分に平和がやってきたと証言しています。

ウィンクは祈りの大切さを力説しています。祈りは最も重要な行為です。しかも祈りは、私たちが「支配の霊」と取り組み、勝利を収めるための手段なのです。祈りによって、神がこの世に入って来られ、変革をもたらされるための道が開かれます。とりなしの祈りは、現行の勢力が向っている未来と違うものを目指します。歴史は、未来を信じてとりなしの祈りによってそれを実現させる人のものなのです。フランシスコの実例はその典型でしょう。彼は、兄弟たちが対抗する勢力に対してフランシスコの優しい歌で対応していた間、自分の部屋で祈っていました。

そして、世界は変わってゆきます。ウィンクは南アフリカの人種隔離政策を打破するために非暴力運動に参加していました。彼もまた、かつてのソヴィエト連邦の思いがけない非暴力の革命や過去数十年間の世界を取り巻く環境の変化に驚いています。これらの変化の陰には祈りと祈りに満ちた行為があったのです。ウィンクは未来がとりなしの祈りを捧げる人々のものであることを信じています。フランシスコは私たちに、新しい未来を切り開いたとりなしの祈りの人の模範を示してくれています。彼は今日のフランシスコたちに、祈りを通して新しい未来を切り開くようにと促しています。クララ会という第二会の持つこの特別な役割を、クララとその姉妹たちは確かに認識していました。今日多くの紛争地における彼女たちの存在は、彼女たちの祈りの重要性を実証しています。

現代の実例

戦時下における非暴力

オドリコ・ダンドレア神父は1954年から亡くなる1990年までニカラグア、ヒノテガのサン・ラファエル・デルノルテ小教区の司祭でした。創造力があって活動的な彼は、その信心深さと地元の貧しい人々のための各種の活動で知られていました。現在人々が利用している施設の多く(道路、橋、家屋、学校、病院、そしてグアダルペの聖母教会も)は、彼が手がけて完成させたものです。サン・ラファエルの広々とした教会は彼が残してくれた永遠の記念です。



彼の平和運動の最も興味深い実例が見られるのは、その地域がサンディニスタ民族解放戦線と反革命武装勢力「コントラ」との絶えざる武力衝突の舞台となった1982年から1988年の間のことです。オドリコ神父は、交戦中の両派に平和をもたらそうとたゆまぬ努力を続けていました。彼は両派

から尊敬されており、民衆の苦しみを和らげるために、また、相手のグループから拉致された人々を探すためと、戦争を何とかして沈静化するために、両方の司令官たちと連絡を取り合っていました。田舎の村落の人々の訪問を終えて夕方帰宅する彼に相談しようとしている人々の列にロシア人将校（サンディニスタ側の軍事顧問）の姿を見かけることも珍しくありませんでした。

オドリコ神父は、ヒノテガの山岳地帯で交戦中の両陣営が、ライフル銃を地面に置いて相対する中で平和のミサを捧げたことで有名でしょう。平和の挨拶を交わす時になると、彼は両グループの兵士たちに、ライフル銃の上に身を乗り出して「敵」に手を伸ばし、握手させることに成功したのです。戦争の真っ最中にこのようなミサを捧げることができたのは、ひとえにオドリコ神父の強烈な個性と祈りによるものです。このことと人々のために行なった多くの活動によって、彼は地元の人々ばかりか、ニカラグアのすべての人々に未永く記憶されることでしょう。

砂漠での対話

「誰であれ、人に近づくのを怖れないことが大切です」とシスター・ローズマリー・リンチ OSF は言っています(Jim Forest, *The Ladder of the Beatitudes*, Orbis Books, 1999, p.125)。「敵と思われる人々に近づくことを学ぶ必要があります。・・・聖フランシスコの精神を少しでも吸収することができたら、その役に立つでしょう。・・・私たちが日ごろ憎んだり恨んだり怖れたりする相手に近づくこと、それも、人間としての愛情を込めて、フランシスコがスルタンを神から与えられた兄弟と考えたように、彼らに接することが必要です。そうすることができたら、私たちに達成できないことなどなくなるでしょう。」

1980年代に米英の核兵器が頻繁にネバダ核実験場で爆発していた頃、シスター・ローズマリーは実験場の責任者マーロン・ゲイツ長官に会いました。核実験に反対する多くの人々が実験場で騒ぎ、一部の人々は実験場の敷地に侵入して市民的不服従の運

動をしていた時に、シスター・ローズマリーは敵対する相手と対話することも必要不可欠であると主張していました。1982年、彼女はゲイツ長官と私的な会合を持つことができました。

これを実践するにあたり、シスター・ローズマリーは対話の必要性を強調したマハトマ・ガンジーの模範に倣ったのでした。彼女の行動もまた、スルタンと接した時のフランシスコの精神を反映しています。フランシスコの目的は、敵対する相手に服従を強いるのではなく、相手の心を変えることでした。ゲイツ長官に核実験を停止させることはできませんでしたが、彼とシスター・ローズマリーは共に祈り、平和の種を播くことに一役買ったのです。二人の協調関係により、その後20年にわたり、何千人もの平和活動家が平和のために祈るために核実験場を目指すようになりました。こうした継続的な活動は、世界の大多数の核保有国による核実験の一時停止を促すのに重要な役割を果たしました。

兄弟とアッシジの市長による二人の大統領の訪問

フランシスコの平和使節を具体化するような試みが最近でもいくつか見られます。一つの実例は、サンタ・マリア・デリ・アンジェリ大聖堂（初期の頃の兄弟たちが住み、聖フランシスコが亡くなったところ）のクストス、兄弟ジャンマリア・ポリドーリの活動です。兄弟ジャンマリアはアッシジの市長とその他の平和活動家と共に何人も国家元首を訪れています。1980年代には、二人はアメリカ合衆国のロナルド・レーガン大統領とソ連のミハエル・ゴルバチョフ大統領に面会しました。それは、ゴルバチョフがソ連の国内改革（ペレストロイカ）と西洋との新しい関係（グラスノスチ）を呼びかける前のことでした。

レーガン大統領はゴルバチョフ大統領と会うために再度ヨーロッパを訪問しました。彼はアメリカを出発するにあたり、ゴルバチョフには「だまされないぞ」と公言していました。彼はゴルバチョフのことを映画「スター・ウォーズ」の悪の帝王ダース・ベーダーになぞらえていたのです。ところが、この二人の大統領は

会うと、いかにして世界をより安全なものにするかについて真剣に話し合ったのです。二人は「ゼロ・オプション」として知られる核戦力廃棄構想に合意しました。この構想はすべての核兵器の廃絶を意味するものでした。彼らは後にこの構想を緩やかなものに修正したのですが、とにかく私たちはより大規模な核軍縮に向かって動き出したのでした。アッシジからのフランシスカンの平和使節と彼らの唱える共同祈願は、世界中の他の多くの努力と相まって、1980年代に軍縮協定が結ばれるその下地作りに貢献したのです。

当時、民間外交運動、すなわち、平和を求める根強い草の根運動が世界各地に起こりました。何千人もの個人や団体が国境を越えて手を携え、政府にはできない調停役を果たしてきました。この草の根運動は今日でも続けられています。

考察のための質問

あなたの生活や地域社会、文化の中に、愛と和解を行動に移した実例がありますか。



第二部 積極的で変革をもたらす非暴力のための資料



1. フランシスカンの非暴力を実践するための出発点

暴力の特徴は強制的な力です。一方、積極的な非暴力とは統合的な力であり、すべてのものの幸せを創造的に粘り強く求めてゆく力のことです。

人間はよく衝突します。問題は衝突するかどうかではなくて衝突それ自体は人生の一部なのでから 衝突にどう対処するかなのです。私たちは破壊的に対処しているのでしょうか、それとも建設的に対処しているのでしょうか。

衝突に直面した時、選択肢は受身でいるか暴力に訴えるかの二つしかないと考えがちです。しかし、フランシスカンの非暴力は、聖書学者のウォルター・ウィンクが「第三の方法」と呼んでいる選択肢を目指しています。すなわち、感情や言葉による暴力とか身体的、構造的な暴力の被害者にも加害者にもならない方法のことです。積極的な非暴力が目指すもの、それはすべてのものの幸せであり、人間同士の間に見られる相違を認めながら、同時に深奥に内在する共通点を確認することでもあります。言い換えれば、「分裂なき相違」を支持することなのです。このような態度は破壊的な力を統合的な力に転換します。ガンジーはこれを「魂の力」と呼んでいました。すべての人間が心を一にすることによって生まれる力のことです。

現代の、信仰に根ざした、変革をもたらす非暴力は下記の信念に基づくものです。

1. 変革をもたらす非暴力が力強い「在り方」であると同時に「行動の方法」であることは古今東西の実例が証明しています。私たちは特に、さまざまな方法で非暴力を証しし、非暴力を実現させる手段を発明した貧しい人々や有色人種の人々の運動を評価します。その最近の実例としては、インドにおけるガンジー主義の独立運動、アルゼンチンにおける行方不明者

の母たち、フィリピンにおけるマルコス追放運動、アフリカ系アメリカ人の公民権運動、統一農場労働者運動、その他多くの運動が挙げられます。

2. 変革をもたらす非暴力は、あらゆる分野の普通の人々のものです。それは私たちの全存在を完全な生きがいのある生活に向かわせるための一つの方法なのです。それは、自分の怒りや怖れ、罪悪感、暴力、暴力によって受けた傷などの「傷ついた部分」をそのまま認めることであると同時に、生まれつき備わっている他人を思いやり、愛する能力を引き出し、育むことでもあります。非暴力は「スーパーマン」のためのものではありません。非暴力は、ごく普通の傷ついた、不機嫌な、しかし回復力のある人間が自分の力を発見し、より生きがいのある生活を作り出す方法なのです。私たちは、頭に血が上っているから、とか、せっかちだからとか、気性が激しいからという理由で自分に非暴力なんて無理と考えがちです。「たぶんガンジーなら非暴力が可能だろう。でも、私は怒りっぽすぎて、いらいらしすぎて、非暴力には向かない」と考えているかもしれませんが、しかし、現実には非暴力の道はすべての人に開かれた道であり、いつでも始めることのできるものです。それは、私たちの全存在を完全で生きがいのある生活に向かわせるための一つのチャンスなのです。
3. 技術や手段の問題があるとはいえ、変革をもたらす非暴力は究極的には、私たちの完全さを願っておられる神に向かって、神と共に歩む霊的な旅路なのです。
4. 変革をもたらす非暴力は、積極的に不正と闘いますが、闘いの相手を悪者扱いすることは拒否します。変革をもたらす非暴力の目指すところは、当事者全員が一定の場を占めるようにすることです。それは、永続的で正義にかなった解決策を皆で見つける必要があるからです。非暴力の理論家であり実践家でもあるアングル・オゴールマンによれば、敵を愛しなさいとのイエスの呼びかけは「傷ついた人に癒しを、病人に

健康を、そして死にかけている人に命を与えたいという願い」を表わしています。このような姿勢は、「邪悪な心を取り除くという全く新しい行為の基盤となることを意図していました。つまり、暴力が邪悪な心を増殖させるのと対照的に、邪悪な心を減じるような基盤となることです。」

5. 変革をもたらす非暴力を実践するための重要な鍵は、自分がその紛争についてすべての真実を握っていると思わないことです。自分に一片の真実があるように、敵対する相手にも一片の真実があるのです。それぞれが持つ異なる真実の「断片」を明らかにしようと努めることによって、私たちはすべての人に利するような正しくて思いやりに満ちた解決策に通ずる道を作ることができます。
6. これを実現する基本的な方法の一つは、人々が自分の傷ついた部分と聖なる部分に触れ、それを他人に見せることができるような安全な場所を設けることです。それは個人で行なうことも小グループのメンバーとして行なうことも可能ですが、一般の人々が自分たちの傷ついた部分や聖なる部分を見るのを助けるようなしっかりした社会運動を起こせば、社会全体のためにそのような「安全な場所」を作ることも可能です。
7. ガンジーが強調したように、非暴力とは「真理を実験する」絶えざる試みであり、この試みを通して私たちは、より人間的になることを徐々に学んでゆくのです。世界は紛争のない理想郷ではないけれども、私たちには人間的で愛に満ちた正しい方法で紛争を変質させる力が与えられています。マハトマ・ガンジーは彼の自叙伝を「私の真理の実験」(My Experiments with Truth) と名づけました。この表題を選ぶことによって、マハトマは自分が何十年にもわたり実践してきた人間化の手段 非暴力もしくは非暴力不服従運動(魂の力) が確かに「実験的な試み」であったことを伝えたいと思ったのです。ガンジーにとって、手段としての非暴力は、個々の状況や紛争について真理を発見するための試みだ

ったのです。すべての実験がそうであるように、この試みも、発見に至るプロセスであって、予測できる結末ではありませんでした。この試みは他の試みよりも難しいものでした。なぜなら、それは計り知れないほど複雑で互いに異なる当事者間の真理を共に発見する一つのプロセスであったからです。それでもガンジーは、自分自身の体験から非暴力に不可欠のいくつかの原則が明らかになってきたので、この手段にますます自信を深めてゆきました。その原則とは、私たちはだれでも「一片の」真理を持っていること、愛と確信に満ちた創造的な方法で互いに相手に接するならば共により大きな真理を発見できること、不正と暴力に組まないことが愛ある行為の基本であること、そして、「分裂なき相違」が可能であること、です。ガンジーの試みは私たちに、フランスカンの伝統における積極的な非暴力の概念と実践というものを今まで以上にはっきりと示してくれました。ガンジーの努力のおかげで、私たちは「汝の敵を愛せよ」というイエスの招きが社会を変革する力を持つと同時に人間を癒す力を持つということを理解することができます。ガンジーの思想は私たちに、キリスト教の伝統やその他の伝統に見られる信仰を持つ人々の非暴力というものを教えてくれます。そして、フランスコとクララ、この二人の後に続く多くのフランスカンたちの平和作りと非暴力の行為の深みを見せてくれるのです。

2. 変革をもたらす非暴力の基本的諸要素

1. 変革をもたらす非暴力は別段新しいものではありません。歴史的にも個人的にも、非暴力は私たち人類と歩みを共にしてきました。これは20世紀の忘れられた奇跡なのです。
2. 変革をもたらす非暴力は手っ取り早い解決策ではありません。ですから、責任と目的意識をもってまじめに取り組む姿勢が必要です。
3. 変革をもたらす非暴力は選択と犠牲を必要とするプロセスです。それは特にすぐれた霊的道なのです。
4. 変革をもたらす非暴力は創造的（支配体制の規則に縛られないし、一つの問題に対して複数の解決策が可能で）で、自由（自分も相手も解放する）で、民主的（だれでも参加できる）です。
5. 変革をもたらす非暴力は基本的な倫理的理解（生きとし生けるものへの尊敬）に基づいており、策略や実用的な理由によるものではありません。
6. 変革をもたらす非暴力の基本姿勢は、手段と目的が不可分であるということです。
7. 変革をもたらす非暴力を用いれば、戦略を（原則ではない）交渉することができます。つまり、*真理を探究し、敵を愛し、不正と屈辱に組まない*ことです。（たとえばブラジルでは、非暴力は「粘り強い頑固さ」として知られるようになりました。）魂の力とか真理把持などの忠実さは、この非暴力によって培われるのです。
8. 変革をもたらす非暴力を用いれば、気づき（物事をまっすぐ

に見ようとする姿勢）と意識の変化（私たち対彼らという二分法を乗り越えて）が個人から始まり、それはグループや社会に広がってゆきます。

9. 変革をもたらす非暴力には、短期、中期、長期の目標があります。
10. 変革をもたらす非暴力を実践するには、守るべき規則を定めて適当な期間内に正確な目標を目指す小規模な訓練から始めるのが一番よいでしょう。



3. フランシスカンの非暴力の靈性に至る十ヶ条

変革をもたらす非暴力は私たちに次のことを求めています。

1. 私たち自身をも含めてすべての人やすべての被造物の中にある「聖なる部分」(クエーカー教徒の言う「神に属する部分」のこと)を認めて、尊敬することを学ぶこと。非暴力を実践する人の行為は、相手の持つ神聖さを引き出すのに役立ちます。
2. 自分自身を、才能や豊かさ、限界、過ち、失敗、弱さなどのすべてを含めた「ありのままの自分」を心底から受け入れること、そして、自分が神から受け入れられているということを認識すること。過度なプライドを捨て去り、錯覚や誤った期待も捨てて、ありのままの自分と向き合うこと。
3. 相手のどこかを不快に思ったり、憎んだりするのは、それと同じ要素が自分の中にもあることを認められない場合であるということを認識すること。自分自身の暴力性に気づき、これを捨てること。自分の言葉や、しぐさ、反応などをよく観察してみるとそれが明らかになります。
4. 「私たち対彼ら」というマニ教的な二分法を捨てること。二分法は人間を「善人と悪人」に分けてしまい、相手を悪者にしてしまいます。それは権威主義者や排他主義者の論理です。そのような態度は人種差別を生み、紛争や戦争を惹き起こします。
5. 怖れに直面し、これに立ち向かうこと。その際必要なのは勇氣よりもむしろ愛です。
6. 「新しい創設」、すなわち「愛に満ちた共同体」の建設は、常に他者と共に行なわれるということを理解し、受け入れるこ

と。それは「単独行動」では不可能です。忍耐と人をゆるす能力を必要とします。

7. 自分自身を創造の神秘全体の一部と考え、その中で支配ではなく愛の関係を育み、地球の破壊が単なる科学技術の問題ではなく、深い靈的な問題であることを心に留めること。私たちが一つなのです。
8. 変革をもたらす非暴力が他者の中にある神聖な部分を引き出す助けになると信じるなら、苦しむ覚悟、それも多分喜びすらもって苦しむ覚悟をすること。それには、トラウマや曖昧さを含めて自分の置かれた状況を受け入れることが含まれます。
9. 神の現存が受け入れられた時、それを喜び祝い、そして受け入れられなかった時、その事実を見出し、認めるために援助できる人であること。
10. ゆっくり、忍耐強く、愛とゆるしの種を自分の心と周囲の人々の心に播くこと。ゆっくりと、愛と思いやりと人をゆるす能力を育ててゆきましょう。

ローズマリー・リンチ OSF、アラン・リシャルド OFM

4. マーチン・ルーサー・キング・ジュニアの非暴力の原則

下記に述べるマーチン・ルーサー・キング・ジュニアの言葉は、Fellowship of Reconciliation が彼の著作「自由への歩み」(*Stride Toward Freedom*) から引用、翻案したものです。

- 1) 非暴力は勇気ある人々の一つの生き方である
それは悪に対する積極的な非暴力の抵抗である。
それは霊的、精神的、情緒的な自己主張である。
- 2) 非暴力は友情と理解を得ようと努める
非暴力の最終結果は救済と和解である。
非暴力の目的は「愛に満ちた共同体」の創設である。
- 3) 非暴力が打ち負かしたいと思っているのは不正であって、人間ではない
非暴力は悪を行なう人もまた被害者であると考え。
非暴力で抵抗する人は悪を打ち負かしたいのであって、人間を打ち負かしたいのではない。
- 4) 非暴力は自由意志により甘受する苦しみが教育効果を持ち、変革をもたらすと考える
非暴力は苦しみを甘受し、報復を求めない。
非暴力は必要とあれば暴力を甘受するが、暴力を振るうことは決してない。
非暴力は非暴力の実践の結果を喜んで受け入れる。
自ら招いたのではない自発的な苦しみに救済力があり、教育効果も大きく、変革をもたらす可能性が高い。
自由意志により甘受する苦しみに、理由がなくなれば敵を回心させる力を持ち得る。
- 5) 非暴力は憎しみではなく愛を選ぶ
非暴力は精神的暴力及び身体的暴力に抵抗する。

非暴力の愛は、相手側に憎悪があっても、喜んで歩み寄る。
非暴力の愛は、積極的であって、受動的でない。
非暴力の愛は、共同体を回復するために際限なく赦すことができる。
非暴力の愛は、憎しみに満ちた相手のレベルに落ちることはない。
敵に対する愛は、自分自身に対する愛を示す方法でもある。
愛は共同体を建て直し、不正に抵抗する。
非暴力は、生きとし生けるものが相互に関係しあう存在であるという事実を認識している。

- 6) 非暴力は世界が正義の側に立っていることを信じる
非暴力の抵抗を実践する人は、正義が最終的に勝つということに固く信じている。
非暴力は神が正義と愛の神であることを信じている。

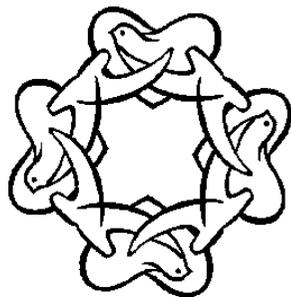
5. 変革をもたらす非暴力を実践する試み：

紛争解決の4つの段階

1. 本当の自分を探す

暴力や不正、その他の争いに直面したら、本当の自分を見つけ、そのレベルで関わるのが大切です。さもなければ、建て前（role）に縛られて身動きが取れなくなります。建て前によっては自分自身や他者に対して暴力を用いてもよいと思えるようなことがあるからです。

本当の自分を見つける一つの方法として、Maureen Gatt と Gerald Hair が「内面の観察者」と呼んでいるものを体験することが挙げられます。すなわち私たちの内において、観想しながら愛を込めて観察する内面の現実の事です。私たちはこの内面の現実に戻り、そこを起点として行動するように招かれています。これを実践するために、「自分は今何を感じているか、視点を広げたら何が見えるか、このような状況において神はどこにおられるか」と自問してみましょう。また、ゆっくり自分自身の内面に集中し、現状において何を為すべきかを決断しましょう。



深い内面の現実にしかりと根を下ろすことによって、直面する争いに対応する（単に反応するのではなく）心構えができます。自分自身を守ろうと決意したり、相手とやりあおうと決意することが可能となります。いずれの場合も、破壊的なシナリオを避け、もっとも自分らしい内面の現実から出発することが可能です。

2. 自己開示(Disclosing our trueselves) - 自分自身に対して、また、相手に対して

それはまず、置かれた状況下でのありのままの自分の感情を探り、それを争いの相手に明確に伝えることです。たとえば、自分は憤りを感じているか、その憤りの陰に悲しみや痛みや怖れが潜んでいないかと自問し、明らかにすることです。

次に、明らかになった感情を争いの相手に伝えるということは、自分の「立場」や「主張」を伝えるというよりもむしろ、自分の心をつかち合うことです。そのためには、相手を「攻撃」するのではなく、現在のありのままの自分を伝えようとする姿勢が必要です。

3. 相手の真理を受け入れること

これは私にとっては真理ではないかもしれないが、彼らにとっては真理だ。そう考えて互いに相手の言うことに耳を貸さないと物事は進展しません。相手の真理を受け入れることは、相手を認める一つの方法でもあります。紛争解決の専門家である Marshall Rosenberg は、「認めるということは必ずしも賛成するという意味ではない」と述べています。相手の立場や立場に絡む利害に賛同する必要はありませんが、相手を認め、相手の真理を認めることはできるはずで

4. 先入観で判断せず、意見の一致を探す

本当の自分を伝え、相手の言うことに耳を傾けることによって、状況の真実と虚偽を見分けるチャンスが与えられます。そこで、先入観を離れ、今後お互いにどうやっていくかについて取り決める基礎ができてくるのです。多くの紛争は現実からかけ離れた先入観から発展します。

These four steps of active nonviolence are adapted from the work of activist and author, Bill Moyer and his workshop, "Moving from Dominating Behavior to Intimacy." Quoted in Ken Butigan with Patricia Bruno, O.P., From Violence To Wholeness (Pace e Bene, 2000), pp. 43-44.

6. フランスシカンの非暴力を育むための日々の訓練

変革をもたらす非暴力は、私たちが自己の深い内面へと立ち戻らせてくれる一つのプロセスです。究極的には、非暴力の技術や戦略はその活力を聖なる源に求めなければなりません。つまり、神が私たちの存在の奥深くに植えてくださった部分を意識して育ててゆくということです。なぜなら、それらの部分は自分や他者、さらには地球と地球に住むすべての人々を活気づけるものだからです。現在はこれまでにないほどに、精神を鍛錬することによって非暴力による変革の思想と手段を身に付けることが求められています。そのためには、非暴力の生活の霊的な部分を日常的に深めてゆかねばなりません。非暴力の精神の土台をなす霊的特質と、非暴力を実践するための提案を以下に示します。

畏敬の念

私たちは日々の生活に没頭するあまり、それがすべてだと考えがちです。自分が家庭や職場、マスコミを通して体験する世界の構造や視野こそ「現実」だと思いつまんでいるのです。その思い込みによって、この社会的現実が「人為的に作られた」ものであるということに気づかないことが多いのです。私たちの人生観を形成し、限定するのは、規則と信念と動機が作り上げたシステムにすぎません。そこで、私たちは人生が、人間の作り上げたシステムよりもはるかに神秘的で計り知れないものであるという事実を見逃してしまいがちです。神学者カール・ラーナーが述べているように、これらのシステムは広大な神秘の海に浮かんでいる小さな島のようなものなのです。人生の偉大で複雑な神秘に対する畏敬の念を育むならば、私たちは人生が自分を取り囲むシステムをはるかに越えたものであるこ

平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。この世で堪え忍ぶすべてのことにおいて、私たちの主イエス・キリストへの愛のために心身の平和を保つ人こそ、まことに平和を実現しています。

訓戒の言葉 15

とを理解することができます。そして、それらのシステムが、私たちの始まりであり終わりでもある神の偉大な神秘を否定したり攻撃したりする時には、そうしたシステムを変えることができるし、また変えなければならないということをも理解することができます。

この神秘に対する感受性を養う一つの方法は、他者との出会いを考えてみることです。ある場合には、これらの出会いはお決まりの挨拶を交わすだけの出会いに留まります。それは、まるでピリヤードの二つの玉がぶつかりあうのに似ています。ところが、他者との出会いが深い交わりの体験となる場合だってあるのです。出会いは互いの存在を認め合う聖なる瞬間、哲学者エマニュエル・レヴィナスがその著書、「全体性と無限 外部性についての試論」[国文社 (1989/03)]の中で述べているように、「互いの眼と眼の間に無限の交流」が生まれるような体験となり得るのです。このようにして、二人の人間が、譲り合いながら屈服することなく、馴染みながら「従属する」ことなく出会う時、二人は「すべての存在の根拠」、すなわち、私たちが創造し、保護し、抱きしめてくれる無限の神秘を、一瞬ではあってもはっきりと体験することができます。

この畏敬の念と神秘に対する感受性を養う一つの方法は、しばし静かな場所に退き、かつて体験した重要な出会いについて思い出してみることです。そのときの出来事を克明に思い描いてから、それがどのようにして起こったか、その結果どうなったかを考えてみましょう。それを思い出しているときの自分の感情に注意してください。この出会いの持つ予測不可能な性質や、社会のしきたりや慣習を超えた可能性について考えてみてください。状況の神秘性を感じ取ってください。そして、両方が自分の内面の深いところを分かち合ったために神秘的な次元が生まれたことを思い巡らしてください。この深みの体験、もしくは内面の神秘は、私たちの推測や期待、システムを凌駕しています。一日中、この神秘に気づくように感性を磨いてください。

感謝の念

非暴力の態度は、自分の命とすべての命に対する深い感謝の念の表れでもあります。それは、生命の源に感謝するという態度です。それは、私たち一人一人が霊的な旅の途上にあること、そして、私たちが体験するすべてのことは、嬉しいことも悲しいこともみな、私たちが教え導き、成長させてくれるものであることを知っています。それは、様々な形で神や、家族、教師や友人から与えられたすべてのことに祝杯をあげるのです。感謝の念を育む一つの方法は、しばし静かな場所に退き、あなたの人生をよりよいものにするよう尽力してくれた10名の人々のことを思い出し、試みることで、彼らの顔を思い浮かべなさい。彼らがどんなことをあなたにしてくれたか具体的に思い起こしなさい。人々があなたのためにどれほど惜しみなく時間や労力、財力を提供してくれたかを思い起こしなさい。そして、神がどれほど惜しみなくあなたのそばに、この世にいてくださるかを考えなさい。全人生が、そして人生に起こるすべてのことが贈り物であることへの感謝の念を深めながら、一日中この気づきの感覚を磨いてください。

他者受容

周囲の人々に対する受容力を養うにはどうすればよいでしょうか？一つの方法は、この世の人々を受け入れ、癒すために、自我の鎧を捨て去ることです。朝、仕事に取り掛かる前とか、あるいはいつでも好きな時間にやれる体操をご紹介します。

立って、両手を横に下ろします。全身をリラックスさせます。深呼吸して神の恵みを吸い込み、それをこの世界に吐き出します。それから、ゆっくり両腕を上げ、目の前で組みます。自分が保護され、守られていることを感じてください。それから、世界に向かって開くように、ゆっくりと両腕を外側に広げます。そして、世界を包み込むように両腕を動かします。これを何回か繰り返してください。この体操は一人ででも、あるいは人と一緒にでもできます。

おもいやり

積極的な非暴力は、すべての人が持っている聖なる部分と傷ついた部分という二つの基本的な局面に目を向けるようにと私たちを促しています。他人の苦しみと充足感の両方を分かち合うようにと導いているのです。積極的な非暴力は、この種の同伴を実践することを折りあるごとに求めています。

おもいやりの心を育む一つの方法は、自分がまだ軋轢を感じている、あるいは嫌だなどと思っている人のことを思い浮かべてみることで、その人が自分の目の前にいると想像してみましょう。その人の目を見つめてください。この葛藤を感じている自分の気持ちをその人に話してみましょ。そして、その人に感想を聞いてください。そこに生まれる「対話」を書き留めたくなるかもしれません。この出会いを、互いに相手のための祈りで締めくくりにましょ。

喜び

この世界の恐怖はしばしば圧倒されるほどすごいものです。恐怖は無視することはできませんが、畏敬の念と感謝の念、他者受容、おもいやりの力を全面的に信じるのが求められています。恐怖は究極の現実ではないのです。積極的な非暴力は、全霊を尽くして神の喜びに与ることによって人生の意味を見いだすことができるということに気づく感性を養う霊的な道なのです。この神聖な喜びにどうすれば参加することができるのでしょうか？それは、この世のほころびを繕おうと地道な努力を重ねながら、全身全霊で喜びを表わすことによって可能です。

この喜びの感覚は、静かに神の笑い声を想像してやることによって、日々培うことができます。この笑いの根源に、神が創造をよしとされ、そこに住まうものをよしとされ、命をよしとされた根源の場所に行きましょ。

Julian of Norwich の次の言葉を思い起こしましょ。「最悪のことはもう起こってしまった。そして、それは修復されたのだ！」

7. ト라우マと積極的で変革をもたらす非暴力との関係

あらゆるレベルで暴力がはびこっている世界では、トラウマを経験することは当たり前のようになっていきます。トラウマはそれほど日常生活の一部になっているために、気づかれないことが多いのです。暴力は時に、個人や集団が直接に体験することもあります。多くの場合、直接体験ではなくて、メディアが繰り返し流す暴力の映像やレポートによって、私たちは暴力を体験しているのです。暴力に対する恐怖心も、極端なまま放って置かれるとトラウマの原因になりかねません。

積極的な非暴力を実践するためには、平静でリラックスしながら警戒心を緩めない態度が求められます。そのような態度でいれば、身の危険を感じるような体験も含め、様々な状況において柔軟性と独創性をもって対処することができます。個人あるいは集団の中にトラウマがあるのにそれに気づかないでいると、非暴力の実践は困難に、時には不可能になります。

フランシスコの完全な喜びの話は大変示唆に富んでいます。フランシスコと他の兄弟が寒い雨の晩に路上にいたときのことで、フランシスコは、心に思いつくままのストーリーを語ります。その話の中で彼と兄弟は隠遁所に到着するのですが、兄弟たちは彼らだと見分けることができず、

すべての兄弟よ、主が「敵を愛し、あなたがたを憎む者に善を行いなさい」と言われることに注意しよう。その御足跡に従うべき私たちの主イエス・キリストは、裏切り者を友と呼び、十字架に釘づける者に御自分をすすんで渡されたからである。従って、困難、苦悩、恥辱、不正、悲しみ、責苦、殉教、死などを、正当な理由もなく私たちに加えるすべての人こそ、私たちの友である。このような人々を深く愛さねばならない。彼らが私たちに加えるもののために、私たちは永遠の命を得るからである。

勅書によって裁可されていないもう一つの会則の断片

隠遁所の中に入れてくれません。それどころか、きつい言葉を浴びせて暗闇の中に追い返そうとします。フランシスコは、それに対してびっくりするような応答を想像します。雨にぬれて凍えそうな兄弟が、忍耐し、自分にひどい仕打ちをしている人々に無条件の愛をもって答えたとしたらどうであろうか！そのように答えることができたなら、それは真の完全な喜びではないか、とフランシスコは言うのです！

心身のバランスを保ちつつ、びっくりするほどの脅迫的な状況に冷静に対処できて、トラウマの癒しを体験したことのある人は、困難を体験している最中であっても、喜びの感情、もしくは穏やかで深い幸福感を実際に表現しています。

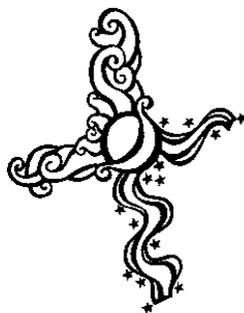
Peter A. Levine 博士は、トラウマの癒しに関する著書 *Waking the Tiger* の中で、次のように指摘しています。すなわち、警戒心や抑制が極端であるとか、いつも防御の姿勢を固める必要があるとか、何かに取りつかれたようにトラウマ体験を再現するとか、無用心に危険に身をさらしてしまうという場合、トラウマが解決していないためであることが多いというのです。ショッキングな体験に対する本能的な反応として生じる不安感を克服できないと、その結果生まれるのは、挫折感と助けようとしてくれている人々から裏切られたという感覚です。彼はまた、トラウマの症状は心理的であると同時に生理的でもあることを理解しない限り、トラウマを解決するのは難しいだろうとも述べています。

戦争や、政治的・犯罪的暴力や自然災害の後遺症について多くのグループや団体と幅広く研究を重ねた結果、トラウマの生理的症狀を解決するのに役立つ多くの発見がありました。

トラウマの症状の原因は、「引き金」になっている出来事や状況ではなく、むしろ、神経系統の中に閉じ込められて身動きが取れなくなっているフローズン・エネルギーから来るもので、症状が現れるのに、トラウマ体験後数年経過してからというのも珍しくありません。神経過敏とか、パニック反応、フラッシュバック、極

度の疲労といったトラウマの症状は、このフローズン・エネルギーの残留物からできたものです。

実際、人間はこのエネルギーを処理し、解き放って、トラウマから新たな創造の可能性と知恵を引き出す能力を持っています。幸いなことに、現代では、これらのエネルギーを処理し、解き放つ様々な方法が発見され、開発されています。私たちの経験では、過去の体験から生まれたエネルギーを処理し、解き放つ能力は(現在の体験から生まれるエネルギーを処理する能力も含め)積極的な非暴力を実践するのに必要な冷静で、リラックスした、集中力のある行動をとることのできる能力を育てる鍵となるものです。巻末の参考文献に役に立つ資料が載っています。



8. 暴力および変革をもたらす非暴力について考察するための二時間の集まりとその議題の一例

暴力の被害にあった後、早い時期に思いやりのある聴き手に出会うことは、平和と和解に向けての必要な第一歩であると考えられる傾向が強くなっています。大規模な暴力が発生した時に、Pace e Bene Nonviolence Service が考案した次のようなモデルが使われています。このモデルは、様々な状況に合わせて応用することが可能で、人々に、自分の感情や信仰の伝統を踏まえて暴力と積極的な非暴力について考える安全な場とプロセスを提供することができます。胸が痛むような出来事の後、自分の内面の真実を無事に認めることができれば、私たちの精神と壊れた世界を修復するための賢く思いやりのある方法が見いだされ、私たちはその体験の深みに触れることができます。

歓迎 - 5分

人々に歓迎の挨拶をします。集まりの目的は、私たちに影響を及ぼしている具体的な暴力について祈りながら考えるための場を開くことであることを説明してください。私たちが作ろうとしているのは、たとえ意見が合わなくとも、自分の感じていることを表明できる安全で落ち着ける環境です。私たちは、すべての人の考え方を尊重したいと思っています。それは、心の奥深くにある感情が表現され、尊敬をもって認められるような安全な場所を作ることによって、新しい知恵と方向性を見いだす可能性を開くことができるという確信の表れです。

この集まりで得た情報があれば、分かち合ってください。

開会式、朗読、導入 - 15分

参加者が車座になるように椅子を配置します。その中央に小さ

なテーブルを置きます。テーブルの上には各人に一本ずつ小さなろうそく（とマッチ）を置きます。その場にふさわしい音楽をカセットテープまたはCDで流します。参加者は、輪になって立ち、両手を前に大きく広げます。次に、深く息を吸い込みながら、ゆっくりと両腕を、指先が付くようになるまで自分の方に戻します。そして、ゆっくりと息を吐き出しながら、両腕をもとのように広げます。この動作を行なっている間、命の力を吸い込み、それを邪魔するすべてのものを吐き出していることを意識するように、参加者に促します。この動作を4回繰り返してください。それが終わったら着席します。

次に、自分のすべてを象徴的に「祭壇」に捧げるように参加者を促します。つまり、各々の聖なる部分と傷ついた部分、真理である部分と「真理でない」部分とを捧げるといことです。それから、参加者はろうそくに火をつけます。その間、参加者は適宜、思いつく単語や名称、イメージなどを述べ合います。それが一巡したら、この考察の手がかりとしてユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教の教えを参考にすることを説明します。まず、知恵の書6章12-14節の朗読から始めます：「知恵は輝かしく、朽ちることがない。知恵を愛する人には進んで自分を現し、探す人には自分を示す。求める人には自分の方から姿を見せる。知恵を求めて早起きする人は、苦勞せずに自宅の門前で待っている知恵に出会う。」

参加者に自己紹介をしてもらいます。

合意事項の分かち合い - 10分

この集まりをできるだけ安全なものにしようと努めていることを説明します。この精神に従い、次のガイドラインに合意するように促します〔合意事項は、あなたが声に出して読んでいる間、参加者も黙読できるよう、事前にコピーして参加者に配布しておきます〕。

1. 私は自分が安全で落ち着けると感じる限り、分かち合うことに同意します。

分かち合わないと思ったのなら、それはそれでかまいません。少しだけ分かち合おうというのも、かまいませんし、もっと分かち合いたいのなら、それもかまいません。私は司会者であって、心理療法の専門家ではありません。私たちは共に、テロリズムと戦争の問題を探求する普通の人間です。しかるべき専門家に相談の方がよいと自分で感じるような状況が生じたら、心理療法家、または司牧カウンセラーに相談なさることをお勧めします。

2. 私は自分が今属している小グループおよび大グループにおいて守秘義務を守ることに同意します。

ここで分かち合ったことは、許可なく外部に話さないでくださるようお願いいたします。

3. 私はこの集まりをできるだけ安全で、落ち着ける、参加型のものにすることに同意します。次のことに向けて努力します：

「私は」という話し方をする；皆の話す権利を尊重し、支持する；積極的に耳を傾ける；非言語的コミュニケーションを意識する；他者に対して敬意を示す；文化的感受性を働かせる；時間を守る(honor agreements about time)；忍耐を示す；他者の話に口をはさまない；正直に話す；率直になる；思いやりを示す。

これらの合意事項について2～3分話し合ってください。(合意事項の意味について質問があれば、大グループでその意味について検討するようにしてください。)それから、合意事項について皆のコンセンサスを得てください。

第二朗読 - 5分

次のマタイによる福音書5章43-46節の朗読にあたり、イエスの御言葉に熱心に耳を傾けるよう参加者に促してください。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくないものにも雨を降らせてくださるからである。」

危機の際に暴力から完全性へと向う4つのステップ - 5分

次のことを分かち合ってください。このプロセスには多くのステップがあります。そのうち4つのステップを紹介したいと思います。第1のステップは、自分に集中し、現在の「本当の自分」(truest self)を認識すること。第2のステップは、現在の本当の自分を自分自身および他者に伝えること。第3のステップは、他者の真理を受け入れること。第4のステップは、先入観で判断せず、意見の一致を探ること。これらのステップを実際に簡単にやってみます。まず小グループに分かれて、今現在の「本当の自分」について考えます。〔詳しいことは、”Putting Transformative Nonviolence Into Practice: A Four-Step Process of Conflict Resolution” pp.33 を参照してください。〕

文章化し視覚化すること - 15分

しばし静かな時間を設け、現時点で自分が感じている、または体験していることを文章化または視覚化するよう参加者を促します。これは、現在の「本当の自分」、つまり、自分が現実に感じていること(怒っている、嘆いている、冷静であるなど)と、自分と世の中のために最も望んでいることをはっきりさせるのに役立ちます。〔参加者にノートと筆記具、白い紙とクレヨンまたは色マーカーペンを配布してください。参加者は、そのまま席に座っていてもいいし、場所を変えてもかまいません。〕15分後、参加者を再び集めて次のステップに移ります。

小グループでの分かち合い - 15分

参加者を三つのグループに分けます。(たとえば、着ている衣服の色別に分けてもよいでしょう。)参加者が落ち着いたと感じられる時点で、現在の本当の自分を表現するように促します。参加者は、自分の書きとめたメモを読んだり、描いた絵を見せたりすることもできます。一人一人の言うことに同意できなくても、言っていることを尊重するように参加者を促します。15分経ったら、参加者をもとの大グループに戻します。

大グループでの分かち合い - 15分

しばらく沈黙して、分かち合ったことに敬意を払います。それから、参加者が落ち着いたと感じられる時点で、小グループでの分かち合いの時に感じたことをこの大グループで分かち合えるならば、そうするように促します。その後、第3朗読として、コーランの第4章114節を読みます。「神を喜ばせるために、人々の間で愛徳や正義、和解を推し進める人はだれでも、大きな報いを受けるであろう。」

ロールプレイ - 20分

参加者に向かい合わせに二列に並んでもらいます。参加者各人は自分の正面にいる人と「非暴力の実践」のロールプレイをします。一方の列は重要な問題に賛成を唱える人の役割を演じ、もう一方の列はそれに反対する人の役割を演じます。両方の列の人々に、向きを変えて、目を閉じ、役柄になりきるように促します。始める前に、これから対面する人のことを自分の人生において最も大切な人と同じように考えるように促します。それから、もとのように相手に向き合ってもらいます。約3分経ったら、止めてもらい、皆で感じたことや体験したことを振り返ってください。

グループでの反省を数分間行ったら、今度は立場を逆にしてロールプレイを繰り返してください(賛成だった列が今度は反対の側になり、反対だった列が賛成の側になる)。ここでもう一度参加者に、「対立する相手」を自分の人生において最も大切な人と考え

るように促してください。それから、大グループに戻って着席し、参加者にこのロールプレイの目的と内容を知らせてください。そして、先入観が自分の中に働いていたかどうか、意見の一致があったかどうかについて考えてください。

私たちはどこに向かって呼ばれているのか？ - 5分

参加者に、隣の人の方を向き、思いついた新しい考えや気づきがあれば（新しい見方も含めて）、それについて考え、同時に現状に照らして今後取り得る次のステップについても考えるように促してください。

閉会の輪 - 5分

皆で輪になって、この集まりを終えるに当たり感想を述べ合いましょう。終わる前に、仏教の Metta Sutra の次の言葉を一緒に読んでください。「母親が死にかけていても自分の子どもを見守り、保護するように、人は生きとし生けるものを、無限の広い心で抱きしめなければなりません。そして、全世界を上も下も隅々まで無限の愛で満たし、全世界に対する無限の善意を育むようにすべきです。」

参加してくれた人々にお礼を言ってください。

9. 経験から学ぶ - 平和をもたらす人となる：

和平交渉についての考察

インド、グワハティ大司教区
トマス・メナムパラムピル大司教

1997年インド、マニプール州で起きたクキ族とパイテ族の衝突で、約400人が死亡、何百という村が焼かれ、何千もの人々がホームレスとなった。暴動は数ヶ月続いた。我々はグワハティとチュラチャンプールで和平交渉を行なうことに成功した。私の引き出しにはチュラチャンプールで受けた銃弾が一個残っている。1998年によろやく平和が訪れた。

1996年から1997年にかけてアッサム州のコークラジャール近郊で起きたボド族とアディバシ族との紛争でも、同じくらいの数の人々が死亡し、200,000人以上がホームレスとなった。少なくとも180,000人が未だに難民キャンプで暮らしている。教会は、数ヶ月にわたり救援活動に携わる人々の信頼を勝ち得、司教たちは、自ら救援活動と和平工作に直接取り組んだ。司教団はグワハティ、コークラジャール、ゴサイガオンで平和集会を組織し、それは、紛争が終結するまで続いた。二つの共同体の約5パーセントがカトリックと思われる。大部分の人々は非キリスト教徒である。

クキ族とパイテ族との間に調停機関が設けられ、状況は安定した。ボド族とアディバシ族との間も和平が成立したが、一部の問題は未解決のままである。

宗派を超えた友人たちの助力のお陰で、活動（平和集会、キャンペーン、ラリー、祈りの集会、象徴的行動(symbolic actions)、署名運動、ピースクラブなどを含む）を組織し、小冊子やポスター、スローガンなどの教育的な材料を作成できたばかりでなく、直接的な和平交渉に密接に関わることができたのは、私にとって幸運

というほかはない。以下のことは、この和平工作の体験を通して学んだことである。

世界中で暴動が多発するのに伴い、和平工作はすべての市民の中心的で緊急の任務となりました。私たちは100年以上もの間、闘いの哲学を糧として生き、正義と権利のために闘うという思想に鼓舞されてきたのです。闘争精神が旺盛になる一方で、和解の技術は衰えるばかりでした。

紛争が起こった時、片方が正しくてもう片方が間違っていると、片方が加害者でもう片方が被害者であるとか、どちらか一方に肩入れして紛争を終結させようとするならば、紛争者間の調停役を務めることはできません。

争いで闘っている人たちのほとんどは、正当な理由があって闘っていると確信しています。彼らは、仲間の正義のために闘っていると主張しています。同様に、相手側も、自分の属する共同体に公正さと利益をもたらすために闘っていることがわかります。こうして、両者の正義感が衝突します。そして、正義が正義と衝突するとき、平和のために働く人は無力感に襲われます。このように、和平工作の体験から最初に学ぶことは、平和のために働く時、失敗を覚悟しなければならないということです。

次に学ぶことはこれです。すなわち、*紛争当事者の動機にある程度共感できなければ、紛争当事者と和解のための対話を始めることはできないということ*です。対話の初期段階で説教したり平和主義者の月並みな言葉を発したりすることは、紛争当事者に怒りと屈辱感を起こさせます。軽率な非難の言葉は彼らの反発を煽るだけでしょう。彼らの主張が下げさだと思えても、彼らに深いところで共感し、彼らの目的に対する情熱や、動機となっている正義感、問題に対する態度、あるいは少なくとも動機の一部に感動していることが必要です。さもなければ、彼らはあなたに心を開かないでしょう。しかし、彼らの不満の大きさに心から驚き、彼らが正当な怒り（少なくとも彼らはそう思っている）に駆られて行き過ぎた行動に走ったことを理解（必ずしも認める必要はな

い）することができれば、彼らは徐々に、用心深く反応を示すようになります。同じことが、もう一方の側についても言えるでしょう。

いずれのグループも自分たちの取った過激な行動をあなたに容認してもらいたいわけではありません。彼らは、いかにしてそのような過激な行動に走らざるを得なかったかをあなたにわかってもらいたいのです。彼らがあなたに求めているのは、言葉ではなくて感情です。彼らがあなたに求めているのは、自分たちと共に怒りをもつことではなくて、*今非人間的な状況に置かれている自分たちの苦痛を感じる*ことなのです。（もちろん、そういう状況ができたことに対して彼らにも責任があるわけですが）

信頼性を勝ち得ること

和平工作の体験から学ぶもう一つのこと、*妥協を知らない最も厳しい戦闘員でさえ、その心の中に平和への深い憧れがある*ということ。では、どんな条件で平和を？だれの条件で？もちろん、一方の側の重要な利益を犠牲にするわけにはいきませんし、名誉やイメージを傷つけるわけにもいきません。もしも和平工作に務める人が信頼性を保持したいと思うならば、紛争当事者が長い闘争の末に手に入れたものを自分は敵の手に渡そうとしているのではないこと、そして、紛争当事者が暴力に走ったのはメッセージをすべての人に強烈に伝えたかったからに他ならないことを自分は理解しているということを、当事者双方に明確に示さなければなりません。

和平工作に当たる人は、敵対関係にある二つのグループとまず交流を図らねばなりません。その人は、仮に調停役または仲介役を自任してその場に臨んでも、断られるでしょう。しかし、中立的な立場を貫き、説得力のある働きをすることである程度の信頼を得ていれば、その人は有利なスタートを切ることができます。

一方の当事者に対してもう片方の当事者の批判をすることは、中立を守る上でよい方法とは言えません。言葉と行いと関係によ

って人間と関わることのほうがずっと説得力があります。偏りのない見解、人間の苦しみに対する感受性、困っている人を助けたいという願望を、和平工作に当たる人は持っていなければなりません。

対話のためにふさわしい人物を選ぶ

紛争の真っ最中には、紛争当事者双方からふさわしい人物を交渉のテーブルに着かせることができれば、それは一つの成果です。では、ふさわしい人物とはだれでしょうか？前線で戦っている人たちが話し合いに応じるとは思えません。彼らの技量は別の方面で発揮されます。また、タカ派の人々が快く対話に応じるとも思えません。彼らは、闘争を続行することに既得権を有するからです。平和のための対話において重要な人物とは、「社会的に重要な人物」のことだと思います。つまり、社会で尊敬されている人々とか、過激派にも中道派にも広く意見が支持されているグループとか、カリスマ的な指導力や預言者的な発言で社会に影響力を持つ思想家、作家、講演者のような人々のことです。

これらの資質について混乱しないようにしてください。「大物」が小さい人であることが往々にしてあるからです。大学を出ていなかったり、読み書きが出来なかったりすることもあります。謙遜で穏やかな話し方をする、ずんぐりした小柄な人もおられます。しかし、洞察力に優れ、好戦的な「ボス」とその一派も耳を貸すほどの人です。やり手が思想家であるとは限りません。やり手は、行動は素早いけれども、それがいつも熟慮の結果というわけではありません。それで、人々を扇動した拳句疲れ果ててしまったり、相手側の罪のない人々を殺したり、重傷をおわせたりした拳句に思考停止状態となり、運動全体が先細りになって消えてしまったりします。運動を支えるために歴史を解釈し、理論を構築し、未来を描くことのできるのは思想家です。私はここで一人の人物に限定しているわけではありません。ふさわしい人物は、社会の様々な階層にたくさんいるかも知れないのです。

最後のアドバイスですが、和平交渉の参加者にお決まりの招待

状を送るだけでは不十分です。和平工作に当たる人は、重要な人々が確実に参加するように、ある程度戸別訪問（直接に、あるいは代理人を送るなど）をしなければなりません。さもなければ、思いがけない結果に失望することになるかも知れないのです。

現実の対話

利害の相対立する代表者が交渉のテーブルに着くに当たり、まだ相手に会う準備ができていないと感ずることがあります。既に現場に到着していても、相手と直接話し合う心の準備ができていないと感ずているかもしれません。その場合、しばらくの間それぞれのグループに分かれて、互いに自分たちの見解を徹底的に議論して練り上げ、交渉の準備をするとよいでしょう。当事者双方のすべての参加者を一堂に集めて、そこで、和平工作に当る人、または、他の中間的なアニメーターを務める人が、歴史的事実や哲学的思想、各社会の知恵、聖書の教えなどに基づいて、熱烈に平和を訴えるというのも効果的かもしれません。アニメーターを務める人のカリスマと道徳的権威如何により、人々の心を大幅に変えることが可能になるかも知れないのです。経験がこの事実を裏付けています。

当事者双方が互いに相手に会う準備ができたと感じた時に初めて、和平工作者は彼らを交渉のテーブルに着かせます。和平工作者が励ましの言葉を述べた後に、当事者双方から代弁者が一人、問題全体を感ずるままに交渉のテーブルの上に置き、平和への願いを表明し、問題点を指摘し、解決策や代替案を提示し、できる限り受け入れやすい方法で相手側の協力を引き出し、話を終えます。この後、問題に対する理解と相手の立場に対する理解を深めるために、皆で話し合いをします。何度か個別会議と合同会議を繰り返して、両者の意見の違いの溝が狭まり、意見の一致の範囲が広がるようになったら、参加者たちは最終的な詰めの協議に入ることができます。このような会議がうまくいかないことも多く、その場合和平工作者は再び初めからやり直さなければなりません。

愛と知恵のあるところに、
恐れも無知もなく、
忍耐と謙遜のあるところに、
怒りも心の乱れもありません。
喜びの伴う清貧のあるところに、
渴望も貪欲もなく、
平安と観想のあるところに、
不安も放浪もありません。
住居を守る主への畏れがあるところに、
敵のつけこむ隙はありません。
慈しみと分別のあるところに、
過剰も厳しさもありません。

訓戒の言葉 27

平和工作者は、交渉の全過程において、紛争当事者に意見の違いを自由にとことん議論させ、自らは賢い援助者の役に徹することが望ましいと思います。そして、交渉が行き詰まった時だけ、助言を、それもほとんどの場合手続きに関する助言を与えるべきです。そうすることによって、時に、紛争当事者は自分達が見過ごしてきた別の見方に気づくことがあるのです。平和工作者は自分の意見や解決案を当事者たちに押し付けないことが大切です。解決策が当事者自身のみつけたものであれば、それらは広く受け入れられ、実行に移される可能性が高いからです。

平和工作者の最良の役割は、信頼の醸成者、調整者となること、そして、交流が容易になるような穏やかな雰囲気を作り手となることです。平和工作者が目立たず、控えめにしていれば、その長期にわたる貢献はより大きなものとなり得ます。しかし、認められたいという誘惑は大きいので、平和工作者は、うまく行けば仲裁者や調停者、裁判官の役割を演じようとしてしまいます。仮に紛争当事者がそのようなアイデアに賛成だとしても、平和工作者がそのような役割を引き受けるのは賢いことではありません。お世辞で認められるかもしれませんが、そこから得られる成果は長続きしないでしょう。理由は簡単です。あなたが提案する解決策は彼らの解決策ではないからです。あたかも何もしないかのよう

にことを為す　これがまことの平和工作者の役割です。

早まった報道は平和運動に致命的な影響を与えます。これは、メディアを遠ざけると言っているものではありません。ただ、ギャ

ラリーにこびを売る必要はないと言いたいのです。平和運動に反対する人々に、あなたを追い詰めて躓かせるチャンスを与えるべきではありません。気をつけないと、あなたのイニシアチブが実を結ぶ前に邪魔される危険があります。だからこそ、早まった報道はあなたを危険にさらす可能性があると言っているのです。

一緒に暮らすということは、妥協する心構えができていないことを意味します。このことは、家族や村、国や国際的な共同体について言えることです。平和工作に携わるチームが為し得る最も価値ある貢献は、対立する当事者をこの妥協という偉大な真実に近づけることです。わかりきったことですが、まだ怒りがさめやらぬ時に格言や金言を引用して妥協を迫り、一挙に解決に向わせようとしても教育効果はないでしょう。紛争を長引かせれば破滅的な結果が待ち受けているということに注意を向けることの方がはるかに効果的です。あなたは紛争当事国の人々の痛みを共に分かち合いながら、長い道のりを歩かなければなりません。そして、彼らがもう一つの解決策を心から待ち望む時に初めて、妥協を勧めることに教育的な効果が現れるのです。

また、妥協が成立しそうな特定の問題を早く提示するのも賢明なことではありません。そうした問題は当事者自身の経験から、自分の直面する膠着状態からの逃げ道を必死になって探すうちに自然に出てくるのが望ましいのです。紛争当事者の重要な懸案事項について妥協を迫ることは、当事者の目には無神経と映るかもしれません。彼らが最終的に自ら喜んで譲歩しようとするならば、それは、彼らの共同体と人類共同体のためを考えて神に捧げる彼らの贈り物なのです。

交渉に当たる人々が、紛争当事者の代理として問題についての決定権を持っていないことも往々にしてあります。しかし、勧告をすることはできます。勧告が歯切れの良い、バランスのとれた、現実に対応するものであれば、良い反応を引き出すことができます。上に述べた最初の流れを決める会議に参加した人々は、地域レベルで同様の会議を組織して同じような雰囲気と善意を醸成し、一般向けに作成した勧告について討議することができます。いず

れの当事者もまず自分側の人々と、次に他の人々と、このような会議を開きます。提案が広く受け入れられたら、行政当局の立会いのもとに当事者共同体は最終交渉へと進みますが、この時、和平工作者は介入する必要がありません。和平工作者がこの一連のプロセスで忘れられたり、片隅に追いやられていたりするならば、それは喜ぶべきことです。なぜなら、誰が平和のために貢献したにせよ、平和の真の作り手は神だからです。

和平工作に関連する諸問題

和平工作に携わる人々が直面する問題は実に多岐にわたっています。当事者双方から、和平への努力全体に対して手ごわい抵抗を受けるかもしれません。和平工作者は、暴力を信奉する好戦者や武力衝突による政情不安から恩恵を受けている人々にとっては、脅威と映るかもしれないのです。平和の作り手になって、他の人々の命を助けたいと思うならば、死を覚悟しなければなりません。何人かの平和活動家は平和運動のために命をささげています。マハトマ・ガンジーとかマーチン・ルーサー・キングはそのよい例です。

和平工作者が接触した交渉相手が出席を拒むこともあり得ます。彼らはキリスト教的なイニシアチブに対して偏見を持ち、耳を貸さないかもしれません。フォローアップ努力を始めるチャンスは来ないかもしれません。人々は度重なる武力衝突のためにやる気を失っているかもしれません。共同体が再び不意に攻撃されれば、共同体の怒りに火がつくかもしれないのです。悪質な噂が故意に流されることだってあるでしょう。メディアは犠牲者の数を多めに報道するかもしれないし、問題の解釈を誤ったり、和平への努力とその成果を無視したり、否定的な意図ばかり主張するかもしれません。

対話が進むにつれ、和平工作者は別の問題に直面するかもしれません。あたかも、言葉の持つ意味が変わったかのように感じられることもあるでしょう。たとえば、誰かが自分の属する共同体の利益のみを考えて「正義」という言葉を使うかもしれませんし、

「平和」という言葉を、不正手段で得た財産を平穩無事を守るために使うかもしれません。「民主主義」とは、好き勝手なことをする意味だったり、不正を働く自由であったり、全くの混乱状態のことであったりするかもしれません。紛争当事者が自己流の言葉遣いをしたり、勝手な歴史解釈をしたり、戦術的な申し立てをしたり、独自の神話を作り上げたりするために話し合いが進展しないこともあります。それでも、和平工作に当たる人はあきらめてはいけません。

傷つけられた記憶がまだ人々の心に残っていたり、相手側に対する否定的な固定観念が生まれたりすると短期間で問題を解決するのは難しくなります。そのような場合、あらゆる和平合意は一時休止となります。相手側に対する敵意が再び頭をもたげるのは簡単です。しかし、平和の作り手は自分の信仰と愛に新たな力と意欲を見いだすことができます。そして、すべてを再びやり直す心構えができています。平和の作り手は過去の傷を癒し、固定観念を取り除くのに大忙しですが、神と一緒にいてくださいます。

平和は神からの贈り物

神においては失われるものはありません。平和は、和平工作者の努力とは無関係に、神が良いと思われる時期に訪れるものです。紛争が終結するには、様々な理由があるでしょう。武器が足りなくなるとか、戦士が疲れてしまったとか、政府や軍の圧力が強まるとか、人々が良識を取り戻すなど。しかし、平和の作り手は働き続けます。平和の作り手の努力は高い祭壇上に揺らめく灯火のように続くのです。そして、神の存在を語り、希望をささやき続けます。

神が人々に、剣を打って鋤の刃に変えさせる方法はさまざまですが、神の平和がついに訪れる時には、すべての丘や谷は太陽の光と喜びに満ち溢れます。闇を払いのけ、希望を抱かせながら、すべての人々の心に秘めた考えを刺し貫くのは太陽の光です。

10. 変革をもたらす非暴力に関するフランシスカンの出版物

1) 正義・平和・被造物の保全資料集 「平和の道具」

JPIC 資料集は、フランシスカン JPIC 担当者および委員会が兄弟達を方向付け、励ます任務を推進するのに助けとなる材料や資料を提供しています。この資料集は、初期養成の担当者や生涯養成に取り組む各兄弟共同体、および司牧職に携わる兄弟達の役に立つことをも念頭に置いています。

この資料集は4部構成です。第1部では、フランシスコ会の源泉資料、現行の会憲、教会の公文書に見られる霊性について説明しながら、正義と平和と被造物の保全に関するフランシスカンの考え方を、本書全体の理論的枠組みとして取り上げています。フランシスカンにとって、正義と平和と被造物の保全のために献身することは、聖フランシスコから受け継いだ使命でありますから、小さき兄弟としてのアイデンティティーと福音宣教の使命を形成するものです。それゆえに、この内容は初期および生涯養成の内容として取り入れるべきものです。

第2部は七つの具体的なテーマで構成されています。これらのテーマは私たちのカリスマの立場からもっともふさわしく、また興味深いものと思われま

How to Act と題された第3部は、過去25年間の本会内の JPIC 活動の歴史、JPIC 国際評議会、正義と平和の分野における管区や協議会の組織構成、JPIC の仕事におけるフランシスカン家族内の協力、日常生活と小教区、コミュニケーション・メディア、教育、福音宣教活動、初期および生涯養成などの各分野における JPIC の活動について扱っています。

第4部では、上記のテーマに関するフランシスコ会総会や総評議会、会憲、聖書、フランシスコ会の源泉資料、教会の社会教説、

および養成綱領を紹介しています。そのほか、様々な祈りや国際機関の連絡先なども掲載しています。

この資料集は、OFM JPIC 委員会にお申し込みいただければ、次の8ヶ国語で入手可能です：英語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、クロアチア語、ポーランド語。最初の5ヶ国語のテキストはインターネットで入手できます：

<http://www.ofm-jpic.org/handbook/index.html>

<http://www.ofm-j.or.jp/doc/index.html> フランシスカン資料集「平和の道具」(日本語版 PDF)

2) Instruments of Peace Led by the Spirit (「平和の道具」 - 聖霊に導かれて)

この本は、2000年10月にドイツの Vossenack で開かれた第一回 OFM JPIC 管区担当者国際大会 (first International Congress for all OFM JPIC provincial animators) でなされた一連のプレゼンテーションをまとめたもので、JPIC マニュアルの付録となるものです。本書は一貫して JPIC がフランシスカンのカリスマの重要な一部であることを主張しています。JPIC の問題を自分の個人的生活と兄弟生活、そして使徒職に取り入れることが、すべてのフランシスカンに求められています。

本書は、「今日のフランシスコ会における JPIC の現状」、「小さき兄弟たちのための情報と挑戦」、「JPIC と養成」、「JPIC と人権擁護」、「JPIC の価値観に基づく体験と生き方」と題するセクションに分かれています。大会の最終的な文書も掲載されています。

本書は英語とスペイン語ですが、インターネットで入手可能です：

<http://www.ofm-jpic.org/congress2000/index.html>

3) From Violence to Wholeness (暴力から健全な状態へ) : 変革をもたらす非暴力の霊性と実践における10のプロセスとカリキュラム

「暴力から健全な状態へ」はPace e Bene Nonviolence Service が作成した非暴力の教育プログラムで、米国、ラテン・アメリカ、カナダおよびオーストラリアで利用されています。これは、あらゆる階層の人々を助けて次のような方向に向わせるひとつのプロセスです。すなわち、変革をもたらす非暴力の力に気づき、これを認めること；私たちの生活や社会が変わるために私たちの霊的基盤を深めること；この非暴力を実践する手腕を身に付け、磨くこと；暴力と不正に満ちた社会構造を非暴力の力で変革する、基礎のしっかりした働き手となること；そして、より正義と思いやりに満ちた世界の作り手となること、です。私たちは一日のワークショップや週末のワークショップを提供していますが、その他に、個人的・社会的な変革のための積極的で創造的な非暴力の霊性と実践を模索する2時間のセッション10回分の議題と朗読を盛り込んだ179ページの本も提供しています。英語版、スペイン語版、フランス語版があり、単価は一冊15ドル(米ドル)で、5冊以上ですと12ドルになります。これに一冊あたりの送料および手数料としてさらに3ドルかかります。注文ご希望の方は下記にご連絡ください：

Pace e Bene Nonviolence Service
1420 W. Bartlett St., Las Vegas, NV 89106 USA
702-648-2281 / fvtw@paceebene.org Website:
www.paceebene.org

4) Working for Reconciliation: A Caritas Handbook (和解のために働く：カリタス・ハンドブック)

このハンドブックは1999年と2001年にカリタス・インターナショナル(Caritas Internationalis, Piazza San Calisto 16, Vatican City.) から出版され、英語版、フランス語版、スペイン

語版が下記にて入手可能です。

Email: caritas.internationalis@caritas.va

2002年9月に「Peace Building: A Caritas Training Manual」が出版される予定(まず英語版、次にフランス語版とスペイン語版)です。



1 1 . 非暴力に関連する組織とインターネット資料

日本語版用

- 1) インターナショナル・ニューライフカレッジ非暴力トレーニングセンター
<http://www.edu21c.net/manabinoba/tohoku/B07003.html>
- 2) 非暴力の心理学
<http://www.wako.ac.jp/~itot/nonviolen/>
- 3) 「非暴力トレーニングの思想と歴史」(山本真 2001 和光大学学生研究助成金論文)
<http://www.wako.ac.jp/~itot/nonviolen/yamamo01.htm>
- 4) さっぽろ自由学校「遊」通信 <第 69 号> 2003 年 6 月
「非暴力トレーニング講座」を開催して(大川誉芳)
<http://i-cis.com/syu/hiroba/tuushin/t200306/t200306.html#Anc128>
- 5) 「平和の文化と非暴力」杉田明宏(大東文化大学)
<http://homepage2.nifty.com/peacecom/CP&NV.htm>
- 6) CPNN (平和の文化ニュースネットワーク)
CPNN とは、Culture of Peace News Network の略です。平和のニュースと平和のメディアを広めようという考えのもとに、平和の文化と非暴力の文化に関する地域の活動、およびメディアの動向の情報を、インターネットによって広げることが目的としています。ホームページへのビジター(レポーター)からの投稿が基本であり、研修をうけたモデレータがそれを編集し、コメントをつけて、誰もが読めるようにネット上に紹介します。

<http://www.cpnnet.net/>

- 7) 明るい非暴力マニュアル
http://pearldiver.txt-nifty.com/door/2004/07/post_2.html
- 8) 『暴力論ノート 非暴力直接行動とは何か』刊行によせて
<http://www.ne.jp/asahi/anarchy/saluton/topics/perforto1.htm>
- 9) 「アメリカ市民運動最前線」(2) - 非暴力トレーニング -
http://i-cis.com/cugi_journal/member/j-3/4.htm
- 10) 非暴力アクション・ワークショップ
<http://www.eonet.ne.jp/~kawanishi-kodomo/forum2003/02activity/subcommittee/13.html>
- 11) 「セカンドステップ」プログラム
「NPO 法人 日本こどものための委員会」が提供している教育プログラムは、米国シアトルの NPO、Committee for Children が開発した「セカンドステップ」です。
「セカンドステップ」は、生きる力と心をはぐくむ教育プログラムとして、米国・カナダではすでに 1 万校以上の幼稚園、小学校、中学校において採用されています。こどもに社会的スキルを身につけ、問題解決能力を与えて、怒りや衝動をコントロールできる方法を教えます。2001 年 1 月、米国の教育省から最優秀のプログラムとして表彰されました。
「NPO 法人 日本こどものための委員会」では、このプログラムの日本版の出版・研修を行っています。
http://www.cfc-j.org/second_step.html

英語版のリスト

Franciscans International
Geneva office ; P.O.Box 104 CH-1211, Geneva 20 – Switzerland
Tel. : 41(22)919-4010; e-mail: Geneva@fiop.org Website:
www.fiop.org.
North America: <http://www.fi-na.org/>
many links to peace and Franciscan sites

Pace e Bene Nonviolence Service
Projects: ***From Violence to wholeness*** and ***Nurturing a Culture of Nonviolence***
1420 W. Bartlett St., Las Vegas, NV 89106 USA
Tel.: 702-648-2281.
E-mail: peterediger@paceebene.org.
Website: www.paceebene.org

Capacitar
www.capacitar.org; international network for healing and
personal and social transformation of the effects of trauma and
conflict

Christian Peacemaker Teams
P.O.Box 6508, Chicago, IL 60680.
Cpt@igc.org, prairienet.orgcpt

Fellowship of Reconciliation
Box 271, Nyack, NY 10960, 914-358-4601,
fornatl@igc.org,
<http://www.forusa.org/>

M.K. Gandhi Institute for Nonviolence
<http://www.gandhiinstitute.org>.

Nonviolence International
Nviusa@hotmail.com.

The Nonviolence Web
Nonviolence.org.
Many links to key nonviolence organizations throughout the
world.

Pax Christi International
www.paxchristi.net.
Rue du Vieux Marche aux Grains 21, 1000 Brussels, Belgium.
Tel. : 32/2/502.55.50. E-mail : hello@paxchristi.net

Servicio Pax y Justicia en America Latina (SERPAJ),
<http://www.nonviolence.org/serpaj>

12 . 参考文献一覧

日本語

1. ステファニー ジャドソン (編集)、「静かな力 子どもたちに非暴力を教えるための実践マニュアル」(1995/12) 嵯峨野書院
2. 目良 誠二郎 (著), 石井 勉「平和と戦争の絵本 4 非暴力で平和をもとめる人たち」
3. 脱暴力宣言 「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」にむけて、平和の文化をきづく会 (2001/08) 平和文化
4. ダライ・ラマ 14 世 (著), 「愛と非暴力 ダライ・ラマ仏教講演集」(1990/04) 春秋社
5. マハトマ・ガンディー (著), 「わたしの非暴力 2 」みすずライブラリー、(1997/09) みすず書房
6. ダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォ (著), 「ダライ・ラマ愛と非暴力」(2000/06) 春秋社
7. 塩田 純 (著)、「ガンディーを継いで 非暴力・不服従の系譜 NHK スペシャル 家族の肖像」(1998/03) 日本放送出版協会
8. マイケル ニコルソン (著), 「ガンジー インドを独立にみちびき、非暴力によって世界を変えた人」(1992/03) 偕成社
9. テイクナットハン (著), 「ラブ イン アクション 非暴力による社会変革」(1995/05) 溪声社
10. M.L.キング (著), 「自由への大いなる歩み 非暴力で闘った黒人たち」岩波新書 青版、雪山 慶(1997/09) 岩波書店
11. ジャック セムラン (著), 「娘と話す 非暴力ってなに？」(2002/07) 現代企画室
12. 「キング牧師 黒人差別に対してたたかった、アメリカの偉大な非暴力主義の指導者」松村 佐知子 (翻訳)、(1991/04) 偕成社
13. ウィリアム=T=ランドール (著), 「非暴力思想の研究 ガンディーとキング」(2002/02) 編集工房東洋企画
14. 味沢 道明 (著), 「家族の暴力をのりこえる 当事者の視点による非暴力援助論」(2002/12) かもがわ出版
15. 亀井 淳 (著), 「反戦と非暴力 阿波根昌鴻の闘い」伊江島反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」(1999/02) 高文研
16. D. デリンジャー (著), 『「アメリカ」が知らないアメリカ 反戦・非暴力のわが回想』(1997/11) 藤原書店
17. 森田 俊男 (著), 「国連学習のために 非暴力の新しい国際秩序を」ブックレット平和のために 1、(1996/02) 平和文化
18. 森田 俊男 (著), 「憲法平和主義読本 非暴力によって平和と正義を」(1993/12) 平和文化
19. 阿木 幸男 (著)「非暴力トレーニングの思想 共生社会へ向けての手法」(2000/01) 論創社
20. 阿木 幸男 (著), 橋本 勝 (イラスト), 「非暴力」FOR BEGINNERS シリーズ、イラスト版オリジナル 41、(1987/02) 現代書館
21. ガンディー (著), 「非暴力の精神と対話」レグルス文庫、新書 (2001/08) 第三文明社
22. ガンディー (著), 「わが非暴力の闘い」レグルス文庫、(2001/03) 第三文明社
23. 前原 政之 (著), 森本 達雄, 「ガンディー伝 偉大なる魂・非暴力の戦士」21世紀文庫 (12) (2001/05) 第三文明社
24. J. ヒルデブランド (編集), 「非暴力革命への道 東ドイツ・キリスト者の証言」(1992/01) 教文館
25. E.H. エリクソン (著), 「ガンディーの真理 1 戦闘的非暴力の起源」(2002/11) みすず書房
26. E.H. エリクソン (著), 「ガンディーの真理 2 戦闘的非暴力の起源」(2002/11) みすず書房
27. 最上 敏樹 (著)「ユネスコの危機と世界秩序 非暴力革命としての国際機構」(1987/02) 東研出版
28. 森田 俊男 (著), 「続 国連憲章・国際法を学ぼう 平和と戦争の法、非暴力、法の支配の理念」シリーズ 21世紀の世界と平和を考える、平和国際教育研究会 (編集) (2002/11) 平和文化
29. アンディ ヒクソン「非暴力をめざすトレーニング・ガイド 内なる力を引き出す 121 のアクション・メソッド」(2004/05)

解放出版社

30. ステファニー ジャドソン「静かな力 子どもたちに非暴力を教えるための実践マニュアル」(1995/12)、嵯峨野書院
31. アーノルド・ミンデル「紛争の心理学：融合の炎のワーク」講談社現代新書 1570 (2001/9)
32. 「平和を創る心理学 - 暴力の文化を克服する - 」心理科学研究会編、2001年5月発行、A5判 174頁 2000円、ISBN4-88848-636-0
33. 平和の文化をきずく会(編集)、「脱暴力宣言 『世界の子どものための平和と非暴力の文化国際10年』にむけて」平和文化 ; ISBN: 4894880105 ; (2001/08)

英語版のリスト

- Peter Ackerman and Jack Duvall, *A Force More Powerful: A Century of Nonviolent Conflict* (New York: St. Martin's Press, 2000)
- Elise Boulding, *Cultures of Peace and the Hidden Side of History* (Syracuse, NY: Syracuse University Press, 2000)
- Ken Butigan with Patricia Bruno, O.P., *From Violence to Wholeness: The Spirituality and Practice of Active nonviolence* (Berkeley, CA: Peace e Bene, 2001)
- Patricia Cane, Ph.D., *Trauma Healing and Transformation: Awakening a New Heart with Body Mind Spirit Practices* (Watsonville, CA: Capacitar, 2000). Contact: 23 East Beach, Suite 206, Watsonville, CA [ZIP].
- Richard Deats, "The Global Spread of Nonviolence," *Fellowship* (July/August 1996). Concise overview! Reprints available from FOR, Box 271, Nyack, NY 10960. 1 copy: \$1.00
- Leonard Desroches, *Allow the Water: Anger, Fear, Power, Work, Sexuality, and the Spirituality and Practice of Active*

Nonviolence (Toronto, Ontario: Dunamis Publishers). Contact: 407 Bleeker St., Toronto, Ontario, Canada M4X 1W2.

Eileen Egan, *Peace Be With You: Justified Warfare or the Way of Nonviolence* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1999)

Bernie Glassman, *Bearing Witness* (New York: Bell Tower, 1998).

Michael Henderson, *Forgiveness: Breaking the Chain of Hate* (Wilsonville, OR: Book Partners, 1999).

Robert H. King, *Thomas Merton and Thich Nhat Hanh: Engaged Spirituality In an Age of Globalization* (New York and London: Continuum, 2001)

Pam McAlister, *You Can't Kill the Spirit: Stories of Women and Nonviolent Action* (Philadelphia: New Society Publishers, 1988).

Hilip McManus and Gerald Schlabach, eds., *Relentless Persistence: Nonviolent Action in Latin America* (Philadelphia: New Society Publishers, 1991).

Bill Moyer, *Doing Democracy: The MAP Model for Organizing Social Movements* (Gabriola Island, BC: New Society Publishers., 2001)

Michael Nagler, *Is There No Other Way? The Search for a Nonviolent Future* (Berkeley, CA: Berkeley Hills Books, 2001).

Roger S. Powers and William B. Voegelé, eds., *Protest, Power, and Change: An Encyclopedia of Nonviolent Action* (New York: Garland Publishing, 1997).

Alain Richard, "Concerning Nonviolence and the Franciscan

Movement”, *The Cord*, May 1989, republished in the Peace Bene Occasional Paper Series No. 1.

Elizabeth Schussler Fiorenza and Shawn Copeland, editors, *Violence Against Women* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1994).

Walter Wink, *Engaging the Powers: Discernment and Resistance in a World of Domination* (Minneapolis: fortress, 1992).

Walter Wink, ed., *Peace is the Way: Writings on nonviolence from the Fellowship of Reconciliation* (Maryknoll, NY: Orbis, 2000)

ビデオ :

Documentaries: A Force More Powerful (six-part series on nonviolent action); *Bringing Down a Dictator; Where There Is Hatred; Doing Time, Doing Vipassana; Eyes on the Prize* (series on the U.S. Civil Rights movement); *From Montgomery to Memphis; Greeneace's Greatest Hits; Weapon of the Spirit.*

Motion Pictures: Gandhi; The Long Walk Home; Beyond Rangoon; Slam.

フランシスカンの非暴力

- 物語、考察、原則、実践、資料 -

2005年4月4日 神のお告げの祭日

翻訳・発行：フランシスコ会 日本管区本部

〒106-0032 東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

<http://www.ofm-j.or.jp/>

TEL: 03-3403-8099

FAX: 03-3401-3215